

行興格本月十

文楽座人形淨瑠璃



橋ツ四

座楽文

一部
金十五錢

新秋を飾る

文樂座の大豪華版

爽涼の秋、一入しのぎ易き時候、大方諸賢愈々御きげん麗しく、恐悦至極に存じ上げます。初夏以來打絶えて御無沙汰致して居りましたが、新秋好時期を得まして、『皆さまの文樂座』大豪華版を以て御目見得する事になりました。津太夫の太十、古靱太夫の沼津、中堅幹部の合邦、久々出演友次郎の由良湊千軒長者、永らく上演致しません珍しい淨曲、皆文樂座極めつけのものであります。舊名鶴澤芳之助、鶴澤彌三郎に改名、披露旁々十種香に出演仕ります。

文樂協會も愈々其の發會を擧げる運に到り、近々主務官廳へ設立の申請を差出すまでに至りました事を謹んで御報告申し上げます。

此の秋に當り何卒絶大の御聲援を御願申し上げます。

昭和十年十月

文樂座

昭和十年十月一日初日

二日 午後二時開幕
三日 午後三時開幕

三日よりの

・御觀覽料・

- 一等椅子席 御一名 金二圓七十錢
- 二等席 御一名 金一圓二十錢
- 三等席 御一名 金七 十 錢
- 一等お座席 御一名 金三圓二十錢

一等お座席は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一 一番
專用電話 七四〇 八番
電話南 三七八 八番

お草履の準備は御座みますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。



行興格本月十座樂文

日初日一月十

幕開時二後午 目日二日初

幕開時三後午 リヨ目日三

伊賀越道中双六

政右衛門家敷の段(三時—四時五分)
大廣間の段(四時十分—四時四十分)

幕間 十分間
沼津の里の段(四時五十分—六時十分)

幕間 十五分間

繪本太功記

尼ヶ崎の段(六時二十五分—八時)

幕間 十分間

由良の湊千軒長者

山の段(八時十分—八時三十分)

幕間 十分間

攝州合邦ヶ辻

合邦ヶ辻の段(八時四十分—十時)

幕間 十分間

本朝廿四孝

十種香の段(十時十分—十一時)

皇軍慰問

渡滿鮮興行日記の斷片

皇國のため、一命を鴻毛の輕きに置き、身を寒風凜烈、熱砂渦卷く滿蒙の荒野に曝す第一線勤務の皆様方を見舞ひ、慰問の微意をつくし、藝術報國の一助にもと滿鮮興行を決行致しました。松竹重役福井福三郎氏に引率され、紋下津太夫、三味線綱造、人形文五郎以下、一行五拾餘名一名の落伍者もなく、無事重大任務をはたしました事は、皆様方御ひいきの餘光と感銘致して居る所であります。

七月二十日

東京興行十七日打上げのため、歸阪後の準備手につかず取るものも取あえず出發の日になつてしまひました。一行五拾餘名文樂座に勢揃ひし貸切バスに乘車、見送りの方々の歡呼の中に出發致しました。道々多數のフアンの御聲援に答へながら一路

神戸阜頭に到着致しました。無事扶桑丸に乗船、多數の知名諸氏の御別御挨拶、松竹興行會長始め専務各重役の御見送り阜頭を壓する幾多のファン諸氏の激勵の御言葉に送られて、正午船は岸壁を離れました。荷物の整理等多忙の中に、瀬戸内海の夕暗はせまります。

七月二十一日

早朝門司入港、正午出帆、行手は名にしほう玄海灘、風吹けば、吹けば六連島をはるかに望み、故國の山影に最後の別をおしみながら、一抹の哀愁にとざされました。

「三勇士」始め語りもの銘々一心に稽古致しました。その稽古の熱烈船中の方々を驚かせた様であります

七月二十二日

終日航海。案じた程の風もなく船中至極平穩。一行皆元氣です。出し

物の稽古に終始しました。

七月二十三日

一行緊張裡に大連は次第に近づいて参りました。午前八時港外に達し先發隊並に各新聞記者の出迎をうけました。間もなく阜頭着、熱心な文樂フアンの歡迎の中の上陸、挨拶の交換もそこそこに全員大連神社、忠靈塔に参拜大連劇場に集合、各自宿舍に引取りました。幹部諸氏は直に旅順に向け出發、自動車を連ねて、旅大道路を突破、白玉山表忠塔納骨祠戦利品陳列所東鷄冠山砲臺、水師營等日露戦蹟を見舞ひ、大連に歸着致しました。

午後三時より、皇軍並に警察官慰問興行を致しました。狂言は三番叟と三勇士であります。無慮千數百、場外にまで、あふれた方々の拍手喝采を博し、非常な好成绩の中に任務の一端を終りました。

七月二十四日

幹部一同滿鐵へ挨拶に参りました特に新しく製作した町娘の人形一体

を寄贈致しました。總裁始め皆様方非常な御喜びで、激勵の辭を賜ひました。午後三時より初日の興行、御目見得狂言は忠臣藏道行、酒屋、三番叟、寺小屋、三勇士、二の替として、朝顔、先代萩の御殿、勸進帳、合邦、三勇士を用意致しました。興行は御ひいき皆様の御蔭で非常にいゝ成績でありました。

七月二十五日

二日目御目見得狂言を上演。

七月二十六日

三日目二の替り狂言を上演。

七月二十七日

四日目二の替り狂言を上演。

七月二十八日

五日目、朝顔、御殿、勸進帳、合邦、三番叟を上演、大連興行五日間大好評の中に無事打上げました。

七月二十九日

朝九時、大連驛頭にて無事税關の検査をすまし多数御ひいき皆様方の御見送の中に出發致しました。廣漠たる滿洲の平原、漫に異境の感を深

めます。午後四時過鞍山着昭和製鋼所幹部其他の方々が御出迎下さいました。鞍山にてはかゝる大がよりの興行は始めてです。特に有志の方々の御懇情もだし難く、一夕興行する事になりました。雨中にもかゝらはらず多数御観客の御満足を得べく熱演致しました。

聞けば遼陽附近で先日來の雨のため線路浸水、列車不通、開通見込たゞずとの事です。皆々非常に心配致しましたが致し方がありません、豫定を變更し深夜湯嵐子温泉に引返し、またが此處は匪賊の危険のある所です。皆々不安の中にも温泉に浴し、のんびりした一夜を過しました。

七月三十日

今日は奉天初日の豫定です。が不可抗力のため奉天の打日を延期致さなければなりません。不安の中に時は過ぎて行きます。幸に午後三時過開通第一列車に乗り込む事が出来ました。水害の跡を弔ひながら無事奉天に到着致しました。直に忠靈塔奉

天神社參拜。

七月三十一日

午前福井氏津太夫其他幹部一同第一獨立守備隊司令官三宅閣下に御面接御慰勞の御言葉を賜つて退出、奉天衛戍病院を慰問致しました。午後奉天撫順の兵隊さん方衛戍病院入院中のお氣の毒な兵隊さんのため慰問興行を上演致しました。皆々目に涙を浮かべて熱心に御觀覽下さつたのには感激致しました。午後三時よりお目見得興行、非常な成績をおさめました。

八月一日

午前中皆々舊城内見物午後三時より二の替り狂言上演。

八月二日

今日は水害のための日程遅延を取返すべく新京乗込初日です。早朝乗車、滿洲は奥地程、日中の温度は高くなりす。しかし夜分はずつと涼氣が満ちて、かへつて内地よりしづぎ易いです。氣温の點でも案じて居た程の事はありません。新京着直に

忠靈塔新京神社參拜。

新京公會堂にて無事御目見得狂言上演、多數フアンの御來場を得て、舞台上も活氣に満ちて居ります。

八月二日

新京二日目です。二の替り狂言上演。大使館にて滿洲國皇帝へ町娘人形の献上の手續をなし幸と御嘉納に相成りました。次に關東軍司令部に南軍司令官閣下を訪問、激勵の辭を賜ひ面目を施しました。續いて無量千數百人の兵隊さんの慰問興行をしました。午後三時より二の替り狂言上演。
鄭元國務總理田邊參議の御案内で御熱心に御觀覽下さいました。夜、田邊參議の御招宴に列しました。

八月四日 多數御見送の中に安東に向ひます午後八時奉天にて乗替、明朝安東着の豫定です。内地の列車と違つて車室も廣いしゆつくり旅行が出来ます

八月五日

安東初日、支那街は水害で浸水家屋無數、しかし御影にて興行は非常なる好成績でした。

八月六日

通關の手續も無事に済み、愈々鴨

綠江を渡ります。滿洲國を離れて、日本の領土に足を入れるのです。名にしおう、名橋、渡れば、あたりの風物とみに變化あるを覺えます。各所に水害の跡を見ながら列車はずんずん進みます。午後八時過多數御出迎の中に平壤に着きました。

八月七日

平壤初日です。牡丹台に乙密台、玄武門等日清戦役の古戦場を用ひ、名物妓生學校を見物致しました。

八月八日

朝鮮鐵道御好意の急行列車に乗じ京城に向ひました。朝鮮神宮に參拜各新聞社に御挨拶に廻りました。

八月九日

京城初日、御目見得狂言上演。此の日朝鮮總督府に至り宇垣總督閣下に御面接、親しく種々御話を承りました。特別の御好意に依り昌慶苑の秘苑を見物する事が出来ました

八月十日

二日目、御見得狂言上演。

八月十一日 三日目二の替り狂言上演。

八月十二日 京城四日目、二の替り狂言上演。

愈々最後の興行です。滿鮮興行を通

じ、幸に好成績で終始出来ましたのは、御ひいき皆様方の賜物と一同非常に感謝致して居ります。

八月十三日

午前三時乗車、十時過釜山着直に關釜連絡船に乗船、朝鮮の山河に名残をおしみつゝ出港致しました。往路と違つて、船はうねりのため動搖がはげしいです。中には多少船酔に苦しめられた人もあつた位です。懐しい鳥影を望みながら船は早や下關に入港致しました。無事の歸還を祝つて、萬歳三唱。午後十一時京都行列車に乗車。

八月十四日

明くれば早や大阪は目と鼻のさきです。諸名士方や多數のフアン諸氏松竹白井會長等の盛な御出迎をうけ無事文樂座に歸還致しました。幸に少しの事故もなく皆々無事、重大任務をはたしましたのは、皆様方の御ひいきの餘光と感銘致して居ります。將來共奮勵努力御期待にそひ度いと存じて居ます。旅行並に興行にあたり特に御便宜を御あたへ下されし方々の御厚情を深く感謝致します
(大塚記)



伊賀越道中双六

政右衛門屋敷の段

中 (竹本むらたふ) 竹本富太夫 鶴澤叶太郎 野澤喜代之助 竹本南都太夫 野澤吉彌 豊竹呂太夫 豊竹駒太夫 切 鶴澤清二郎

人形

石留武助 吉田玉徳 妻お政右衛門 桐竹紋十郎 唐木政右衛門 吉田玉藏 宇佐美五右衛門 桐竹門造 娘おのち 吉田文枝 乳母お倉 吉田文之助 母柴垣 桐竹紋太郎

政右衛門屋敷の段 大廣間の段 沼津里の段

この淨瑠璃は近松半二の作で、天明三年四月二十七日初日の竹本座に初演されてゐます。半二はこの上演に先だつ同年二月四日に歿してゐますから、この作が絶筆になつてゐます。津井股五郎は渡邊靱負を殺害して、其所持の一刀を奪て東海道筋を下て逐電した。郡山の唐木政右衛門はこの飛報に義弟のために舅の仇を討つ助太刀をすべく決心し女房お谷を離別したいけな七歳のお後を後連に

迎へるといつた反問苦肉の術策まで催し、藩公譽田大内記へ暇を取るべく晴れの試合まで、わざと負けを取つて暇の出るやうに念じたが却てその腕前膽力に藩公の重用を促し、眞劍白刃の寸前に眞影の極意を傳授し殿の允許を得て目出度く仇討助太刀に出向く。靱負の一人志津馬は政右衛門の助太刀を得て仇澤井股五郎の行方を探しまはつてゐた。吉原で敵を尋ねまはつた志津馬は瀬川と馴染を重ねた、その瀬川のお米は沼津在の平作の娘であつた。志津馬の破風傷を癒さんためにお米は日夜心を痛めてゐた。圖らず平作がつれて戻つた旅の客重兵衛は實は平作の實の子でお米の兄にあたり幼い時に子にやられたもので今は股五郎方のもので

あつた、印籠からそれと知つたが親子の名乗もあへず苦ししい別れをして立ち行くが、後追かけた平作が股五郎の消息をきかせてくれと實の親父が今世の頼みに、腹を切つて、今落ち行く平作に引導替りに股五郎の落行く先を知らせる。平作の息は絶へたが藪かげにはお米が孫八と共に開

(床本) 政右衛門屋敷の段(中)

ゐてゐた。政右衛門は箱根の關所を越える切手が無いので飛脚助平が遠眼鏡に見惚れてゐる隙にその切手で通り抜けた爲に岡崎で捕手に圍まれた。その危急を助けて呉れたのは眞影流の達人で政右衛門の舊師の幸兵衛であつた。政右衛門の女房お谷は乞食姿になり果て、はる／＼夫の行方を探ねて来たが義には代えられぬとすげなく追返す。義と人情の綱

に勇士烈婦の心境を描いた名作。
昔は山の後なれや今も名のみは郡山
家中屋敷もつくろはず直な唐木の武
目有る家の柱は退去りに奥様役の留
守預り石留武助は忠義者、常の奉公
裏表、内證賄ひいそがしき臺所より
願元共ばらん、と立出、コレ武助殿
今夜は内方へ嫁御様が見へるげなお
目出度い祝言振舞わたしらもあやか
る様にお手傳ひに参りました。イヤ
御苦勞、小身の旦那政右衛門様仲
間一人下女一人若黨の此武助が料理
人やら家老やら人手がなさに御家中
の女中方を御無心、侍女郎にも酌人
にも各様頼みますイエ、同じお給
仕でも祝言と聞けば氣がしよぎ

したが合點の行ぬ事はお谷様といふ奥様お里歸りなされてから聞けば去られなさつたげな、がまだぬくもりもさめぬ中新らしい女房を入るとはモ餘りな手廻しサイノ今度の奥様はどこからお出なさるのじやえイヤ家元もうつつ存ぞぬ何だか知らぬが旦那が一人呑込で今夜嫁を呼程に祝言の拵へせいと言付て出られたから何が俄に料理拵へ少斗り開はつた海老の舟盛、置鯉、置鳥などいふしちむつかしい事は取置鮎の吸物腹合せは新枕の心じやげなが、肝心の嶋臺を忘れて正月のお古を組かへ間に合せたがいかねいものは鏡子かへの折形御存じなら折て戻いていハテ何の其様に儀式せいで大事ない仲人さへない嫁入今迄どこぞにこつそ

りと圖て有つた女中で有るホンニあの政右衛門様もお顔に似合ぬ色事仕先の奥様はお腹が立ふヲいそれく馴染の女房隙取らして後へ来る嫁づらはどんなお顔じや見てやりたいとさがない女子の口々にうたて

(床本) 政右衛門屋敷の段(次)

浮名の高話し、うき事の思ひの種を身に持て我内ながら心置く夫の留主を頼ひ足腰元目早く、奥様よふお出なされましたと言ふに武助も押下り幸ひ只今旦那のおるすお歸りならばお知せ申さうまづおゆるりと、あしらふ程いと重なるうさつらさ諸白髪迄と言ひかはした人の心も替ればかはる我内へよふ來たといはれるようになつたわいの身に覺へはなけ

れ共親分の五右衛門様どのよふなあやまりしたぞ、いとまの印の此一履わけが立たねば受取らぬとお屋敷にも置れねば立よる方もない身の上、見ればいかよ賑やかながお振舞でも有のかと問はれてそれとは言ひかぬる後先見づの下女はした。今夜はお屋敷へ嫁御がお入りなされます。ヤア嫁とは誰が嫁、コレ武助もやそふではあるまいと思へど、もし旦那殿に女房が来るのじやないかやイヤ其儀はエ、武助殿、かくしてもどふで知れる事、政右衛門様のお内儀様で御座ります。下地からわけのある事かして、今夜俄の御祝言、私等も隣り屋敷からお給仕に雇はれましたお前様は先の奥様、つつきりとお妾に見かへられなされたに違ひはない

ぐつとおりんきなされませと、身にもかゝらぬ下々の法界格氣に焚付けられいと重なる口惜さ包かぬれば見て取武助エ、コレ女中方役に立たぬ事はずとお臺所に人がない、爐の炭もついでもらふアイ、合點じやテア皆お出で旦那のお歸り待ち女郎こちらも嫁御の相伴でよい夢見よふと打つて立て行く間を待兼て、かつばと伏して泣居たるヲ、お道理ぢや、したが申し奥様必ず格氣なされませなへアノいやる事はいの格氣とは一通りの事、非業の死をなされたと、様、弟、志津馬が敵討の力と頼むはたつた一人其夫政右衛門殿縁切れたれば誰を頼みに大敵の股五郎いつ本望が遂げられふ、力も綱も切はてしと思へば胸が張り裂るとな

げゝば供に泣じやくりお氣づかいなさるゝな、たとへ旦那がどふおつしやつても拙者めが命にかへても此御縁は切らしませぬ情氣なされなとはそこの事お前様のおなかには政右衛門様の御世繼がござりますぞへ、去り狀取ふが後づれがは入らふが其お子さへ御平産なされたれば切ても切れぬ血筋の縁政右衛門様の奥様と言ふはおなか證據のお谷様、敵討の助太刀も頼みの種の人參子サ産み月に氣を揉んであやまち有ればどふなさるゝ追付旦那お歸り有らば溶氣がましい御顔なされずとかく此内を動かぬよふになされませ御合點が参りましたかア、とは言へ義理の有る女房去て嫁入の祝言のとは旦那はどふしはお心じや拙者もいつさい合點が行

かぬ、ほんに此蝶花形、私は折様存ぜぬお前様お頼み申ますと言はれて手には取りながらみすゝ夫を瘦取らるゝ、あた憎らしい蝶花形、犬骨折つて早ぶさの鷹の餌になる春の雉子、そとに夫の聲聞こへあれ旦那のお歸りしばらく忍んで御座りませと家來が情けを力草逢たい夫にかくるゝも疵持つ心唐紙を押開け

(床本) 政右衛門屋敷の段(切)

心がけ有る侍は地を這ふ虫も氣を赦さぬ唐木政右衛門伊達を好まぬ刀の柄前、人に勝れし袴の幅、上屋敷より歸り足、武助手を突きや申し御旦那殊のほかお隙入り御用の品はいか

此間から辭退する彼林左衛門と武藝

の試み明朝正六ツ時御前において立合と押付けて御家老の言渡しエ、今晚妻を迎へます婚禮の中一兩日お延し下されとサ願ふてもいかな開入らず女房呼は私事明日は延ばされぬとモさりととは心ない家老殿此方は内へ氣がせくもゝ尻に成に漸う只今エ祝言の拵へ用意は出來たかア、ヤレ、知行取にも飽果た嫁の來るまで袷脱て休憩せふ、枕おこせ女子共アイと返事もさし足に角を隠せし塗枕そつと傍へに奥様を腰元がはりの見へ隠れ袴は解ど胸とけぬ尖ひ常の侍肩衣折てたゝんで取直す詫の種とは見付た夫ヤイ武助アノ女は何者じややい。エ、イ、イヤあれは彼今日お目見へに参つた新參の女中、ムサナ、ハイ旦那様お目かけられて

下さりませ。フウ奉公人じやな。見かけから愚鈍そふなつゝいかな女なれどマ、遣ふて見てくれふ。コリヤヤイ今夜は身共が女房を呼むかへる祝言の給仕申付るぞエ、アノ嫁御とお孟の其給仕をせいとほエ、ソリや餘り、イエサア餘り急な御祝言不調法な私が給仕得せずば奉公叶はぬ立て歸れア、イヤ申何でも御意は背きませぬと下女に成ても夫の内放れ衆たる心根を察して武助が呑込涙ヲ、そふだく、奉公は辛棒が大事何おつしやらふとナイ、とそこら程よふ、搥梅加減ヤドレお孟の用意せふと料理をしほに立て行折から宇佐美五右衛門様御出と案内すハア又堅ぞふがわせられた誰ぞ羽織持こいと云はぬ先から心得て勝手覚えし

女房の徳、氣轉きかして後から着せる羽織をひつしよなくエ、子供ではないはい差出女めあつちへ行と、ねめ付られて是非なくも立聞せはしく入くる五右衛門、彌左衛門裁の袴こは張切てむづと座し政右衛門殿今晩は其許に嫁入が有と承はり御祝儀申に參つた老人の寸志そと御覽下されヤ是は、婚禮を祝しての御發句でかな、先以て忝なしと押附き見て驚き顔フウこりや拙者への果し状でござるなヲ、サハテ存じ寄らぬ先其意趣の次第はな、しれた事さ、科ない女房なぜ去つたハ、い、拙者が女房を拙者が去にお手前様が何故の御立腹、イヤサ言まいエ、てや、尤もお谷は上杉の家中和田行家が娘なれどお身と密通して二人連れ

郡山へ驅込だ流浪の体不便に思ひ且はお手前が器量を見込殿へ申て有付せはサ此五右衛門、其上勘當受けて親のないアノお谷身共が娘分にしてい改めてお身にくれたれば以前は行家が娘にもせよ、今は身共が娘、少々々の見落し有とて去れる義理ではないぞよ、イヤサ、一旦の恩を忘れ外の女房持かへて此五右衛門を踏付た仕方エ、堪忍ならぬが夫共お谷に據ない科でも有か、サ、い、それ聞ふ、返答次第座は立せぬと鏝打叩いて詰かけたりイヤもふ重々御尤千萬がお谷に微塵も科はなし去た仔細は別儀でない、どふ致したか飽ました。イヤモ女房と言ふものは飽てから片時も持て居られるものではござらぬサ、い、御立腹は御尤が

爰をよふお開きなされ只今拙者と討
果されては五右衛門殿へ不忠に成ま
せふがやサなどとおつしやれ明朝御
前において櫻田林左衛門と劍術の勝
負を致す此政右衛門はまだ拙者を推
舉なされ明日も已に以て勝負見分の
役目を仰付らるゝ其元が拙者をざつ
ぷりと切てお仕舞なされてサ殿へは
何と言譯はなさるゝぞ是非憤り晴
ぬと有ればハテ何と致そふ武士の因
果明日の御前を勤めて其後でお手
かゝりませふ暫く宥免下されと理に
詰められて、さしもの五右衛門ムヤ
コリヤ尤、意恨は意恨御用は御用、
明日までは傍輩の役目中よし、ス
リヤ御得心下さるかア、忝いハ、
い、然らば今宵は是に緩りと御
酒一献お上り下され追付新しい女房

が参るイヤ又其器量のよき雪と墨と
の替徳、古女房のお谷めは不器量の
上に因果と早ふ子をはらんで正眞の
河豚の横飛、ハ、ハ、ハ、イヤモ、飽
たを無理とは思し召なと愛疎盡しを
立開の障子に齒形も入斗り登るつか
へを折しも有れ嫁御様早是ヘヲ、待
兼た早ふ通せ女子共ソレ燭臺に灯を
燈せ鳴臺鏡子と騒ぐ程五右衛門がむ
かつき顔玄關より奥座敷直に手操の
紙乗物對の箆箭に染込の覆ひも愛持
介添女房ヲ、太儀、イヤナニ宇佐
美公只今彼妻が参つたお祝ひ下され
ア、お目出度儀でござる御推量下さ
れヤ貴公には御退屈コリヤ、あな
たに御酒上いよア、イヤ拙者御酒た
べると胸が悪くござる是は氣の毒然
らばお菓子イヤサお構ひ御無用ハテ

堅くろしい何がな御馳走コリヤヤイ
新參の女何をうろく、まい、と其
不調法では祝言の酌は得せまいお客
人の肝癢ソレお背中でも揉で上いと
言ふ程腹の立波に音を泣千鳥四海波
扱我等今晚の花婿、袴を着る筈なれ
ど天窓から打解る様に角菱やめて此
儘の見參サア、早ふ女房共の顔が
見たいヲ、お心安い御様で、嫁御様
のお仕合せ取しがつてござらずとサ
ア、ハ、お出なされませ、と乗物明れ
ば綿帽子に履より上は埋もれて七ツ
斗りのいと様御察尺にも合ぬかい取
ほら、帯につられて座敷にとんと
乳母是取て、ア、申其帽子はお盃
の濟まで召してござれア、イヤ、
戀としからふ取てやりやどれ、戀
女房の御面像とぼうし取らせば尺長

もしまらぬけしの花嫁御直す三方土
器を乳母が持添戴かせ舞君様へ上ま
するア、忝い、女子共皆見てくれ
何とマアちよつこりと何處に置ても
邪魔にならぬよい女房で有ふがな、
ハ、ハ、ハ、ハア嬉しい、目出度ふ
一つ次の間より千秋萬歳の千箱の玉
と譚聲、襜の袖に一通取乗立出るヤ
アお前は母様柴垣様と驚くお谷に目
もやらず政右衛門に打向ひぐわんぜ
ない此娘を女房に持て下さるは此上
の本望なし、舞引出の此目録は主人上
杉宇内様より笹志津馬に下されし敵
討御免の御書が彌々助太刀なされて
下さるマお心じやないヤモお尋ねに
及ばず承知致して罷り有るコリヤ新
參の女も能開け身共には先妻が有た
れ共な親の赦さぬ不義密通行家殿の

勘當の娘どれ合女夫の悲しさは表立
て舞舅といふ事はサならぬぞよ、今
郡山の扶持を戴く政右衛門がよしみ
もない他人の助太刀がサ成べきか、
コレ此おのちばな世間晴れた行家殿
の忘れ笹志津馬が、妹に違ひない此
子と今祝言すれば是こそ誠の舞舅、
舅の敵小舅の助太刀、仕ると殿へ御
願ひ申さんによも不届きとは思され
まじ、かなたこなたを思ひ斗つて科
もない女房去た謂れはサ此通り、義
理と言ふ色に迷ふて五年の馴染に見
かへた心ヤコレ、汲わけて五
右衛門殿御立腹の段々は眞平、ア
、アウ我等ずんと酔ました何申すや
らイヤモたわい、と酒に紛らす本
性の言譚聞て手を合せ、よふ去て
下さんした其誠をちつとの間も恨ん

だ女子のまはり氣を勘忍してエ、マ
下さんせ、サ身共もよい年をして
疑ひの悪口ヤモ去りとては面目ない
ハアあつばれ武士かな政右殿此祝言
は敵討の門出武士道も立ち家も立つ
ア、よい嫁を迎へられた扱々目出度
い婚禮我等も共々御取持と始めの腹
立打てかへ一度に顔のホ、ア、ホ、
ハ、ハ、ハ、ハ、色直しハアお心がなれ
ば彌々かはらぬ政右衛門が後連のお
後や二世かけてそなたの男今夜から
抱いてねるぞヤコレ女房共、と言
へどお後は欠び交り乳母もふいのふ
とやんちや聲、ヲ、是は娘とした事
が嫁入早々いんでたまるものかいの
三々九献まだ済ぬ殿御の敷くものじ
や、イヤあからはいやじや乳母あれ
ほしい、あれとはム、お饒かへホ、

「イヤ」さもしい奥様では有ぞア
 イヤ、道理じや、可愛女房に
 何惜からん併し一つは過る半分は身
 が預る是が夫婦のかためぞと持せば
 ほや、饒頭えくぼホンニ忘れた嫁
 君の御持參の御道具と箆の引出し
 廣蓋に盛ならべたる持遊びの市松人
 形風車七ツに成る子に殿を持せ濟し
 たしやん、濱松の音はざんざ座
 はかはらねど我夫を夫といはれぬお
 谷が心、思ひやつて居るはいのそも
 じとはなさぬ中ほんの娘の此お後と
 見かへさした繼母が御殿に悪性根付
 たと恨んでばしま下さんなア、勿体
 ない事ばつかり私が縁の切るのはは
 様へ不幸の言譯政右衛門殿いつ迄
 もあの子と添て下さるが家の爲志津
 馬が爲、わしや死るまで去られて居

るが嬉しいはいのと明し合親子の貞
 心三國一思ひは富士の郡山解て涙を
 汲かはず酒も裏に入れぬ、と夜も
 更渡れば稚子が乳母すう寝よふとち
 ゃさがすヲ、此お子わいの七つにな
 るまで乳たべる子が有ものかソレ殿
 御の手前もお恥なされアイヤ大事
 ない、是からが新枕、腰元共床を
 取身も追付寝るコレ乳母ソレ女房共
 にし、やつて寝さしてやりやといた
 はり心付くに乳母のお倉が抱か、へ
 寢所に伴ひ入れれば政右衛門宇佐美
 が前に手を突改めて五右衛門殿へお
 願申上度仔細有りサア、役には
 立ずと身共も力に成たい何なりとも
 遠慮なふ承はらふサ、どうかエヘ、
 ハア御親切忝し近頃申兼たれ
 共其元様には明日御前にて切腹なさ

れて下されいムサ其仔細といへば明
 六ツ時櫻田林左衛門と立合仰せ渡さ
 れし此勝負に拙者負まするトハまた
 なせなサレバサ高の知れた林左衛門
 打すへるは合點なれど勝ば御前の御
 意に叶ひお暇が出ぬ時は助太刀の望
 叶はず御前に置いて此政右衛門もの、
 見事に打負けそれを落度知行差上
 る人して思ふま、小舅の助太刀致す
 所存、時には拙者が劍術を吹聴なさ
 れた其元様負た我らが恥よりも見損
 ふた御恥辱もや生てはござるまい
 腹なされにや成まい、是迄厚ふ御最
 負下されさま、御恩に預かりし恩
 を仇と申さうか腹切て下されと申出
 すは五臓の血を一時に吐よりも苦し
 けれ共舅の敵が討たさ志津馬に本望
 遂さしたい斗りにか様の不届を申上

大廣間の段

大内記 竹本文字大夫

政右衛門 豊竹和泉大夫

林左衛門 竹本源尾大夫

五右衛門 竹本貴風大夫

近 豊竹駒尾大夫

近 竹本津磨大夫

近 竹本可美大夫

野澤勝平

人形

譽田大内記 吉田扇太郎

宇佐美五右衛門 桐竹門造

唐木政右衛門 吉田玉藏

櫻田林右衛門 吉田玉幸

小姓 吉田玉男

近習 吉田利男

近習 吉田萬次郎

近習 吉田萬次郎

る御赦なされて下されと鬼を欺く政右衛門わつと泣たる眞實に感じ入るムイ尤も命進上申すイヤモ何よりも安い事が只残念な林左衛門めに馳面かゝせんと思ひしに返つて此五右衛門面目を失ふて相果るは悔しけれど貴殿が本望とげたれば其時すゞ暫しの無念誠有る侍の爲に敏腹一つが役に立ば身に取て大慶ハ、い、イヤと死るを常の武士氣質アレ聞たか主人に預るお命を我々に下さるゝソレ有難いとお禮申せ女房どもとは言はれぬ表、親子共又言はぬが孝行勝べき勝負を負るも義心、恥辱を取て御最期も侍、同士のお情けと互に禮儀の中々に涙備す八ツの袖、時計の七ツせはしなくアレ早勝負の刻限近し身は先へ登城致す用

意有政右衛門貴殿のお暇出るを相圖に身共が切腹御邊は直さま鎌倉出立冥途の立立早參る、ハ、ハ、ハ、ハ、御苦勞後刻と式禮點禮性念武士の短夜や明る間を待つ最後の門出、いさんで御前へ……

(床本) 大廣間の段

時過て早明六つのしらせの太鼓朝日かじやく大廣間大内記殿上段の禪に着座成ければ近習の武士各御前に並び居る、政右衛門は大のしなへ櫻田は兼てより好む所のさぶり流長柄を持て待かくる、双方呼吸の透間なく先を取らんといどみお切先刃金はなけれ共、鎧を削る心の眞剣、打合数は帳面に見る人々も息を詰暫く時を移せしが兼て期したる政右衛門、

櫻田が鏡先をあしらひかねたる手のくるひしなへがらりと巻落され鏡に脾腹をうんと斗り面目なふこそ見へにける。勢ひ込で林左衛門ムヘヘ

ムヘヘエヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘ何といづれも御らふじたか影廣言は誰も言ふテまさか勝負にかゝつては生兵法が役に立つものではないわさ此様な拔体殿をお取持なされた五右衛門殿何と只今御合點が参つたかいエ御合點が参らずば今一勝負仕らふかい何とでござる五右衛門殿ハヘヘヘ、イヤハヤ通のお目利ヘヘヘ

切腹先待たれよと近習の聲々、アハ〜と斗り暫し控へてひれ伏せば櫻田林左衛門唐木政右衛門兩人共是に參れハアはつと一度の答へさへ肩で風切る櫻田と唐木は枯ししほれ枝、見すばらしげに躊躇るヤイ政右衛門只今の勝負大内記是にて逐一見届けたぞ其方が致し方ホヘ神妙に思ふぞよと仰にハアヘよ斗り夢見し心地一座の不審アイヤサ其方共は今の立合を何と見た尤勝負は政右衛門負たれ共、始めよりつく〜見るに身構へ太刀揃ハアよつく鍛し誠の達人林左衛門が中々及ぶ所ならず彼が心を察するに新參の身を以て古參の者に恥辱をあたゆるは武士の情にあらざと態と勝を譲りしは劍術斗りか心まで奥床し頼もし〜政右衛門を取持した

五右衛門身が爲には天晴忠臣誤りと思ふべからず又林左衛門事は怪我が勝をそれとも知らずいかめしく罵るは我藝の我でに見へぬ不鍛練千萬知行くれるは國の費へ暇をつかはす勝手に屋敷を立退べしと案の外成る御上意に林左衛門一句も上らず突き殿の御賢慮に恐入たる一家中御前に叶はぬ林左衛門何をうぢ〜仕召るサヘ早立召れとせき立られした〜かぬめに大廣間強將の元に弱卒なすと馬鹿の家來にや馬鹿がなるわい身構へ太刀揃エ、馬鹿〜しいアヘ此様な主人を持って居ちや生涯頭のおがるためしはないドリヤ歸つてくりよヤイ政右衛門うぬよつほど仕合せなやつだぞよどこぞで急度此返報するウヌ待ておるム、一人す〜立て行く

沼津里の段

切 豊竹古靱太夫

鶴澤 重造

豊澤 猿糸

胡弓 豊澤仙三郎

人形

親 平作 吉田玉次郎

吳服屋 重兵衛 吉田榮三

娘 およね 吉田文五郎

荷持 安兵衛 吉田兵次

池添孫八 吉田多三郎

重ねて政右衛門に言ふべきは新参ながら其方式藝の鍛練感じ入る。二百石加増申付る。黒書院にて改盃今より一家中の師範と成り彌々忠義を勵んでくれよといと懇ろに仰有しづ／＼御座を御太刀持小姓引連入賜へばぐはらりと違ふ胸算用二人は顔を見合す斗り只うつとりと手を粗んで政右衛門殿五右衛門殿ハツハ是ではお暇は願はれまいサア身共も折角切かけた腹がひねに成たコリヤマアどふと腰も抜け一度に溜息次の間より襦をさつと譽田大内記鐘引提て立出賜ひヤア／＼不忠者の政右衛門大内記成敗せんそこ動くなと突かけ賜へば扇のあしらひ是が即ち神影の即信ム、尤々是が奥儀の秘事口傳所を突出す左の扇、是又即刀三ヶの大

事ヲ一承知／＼透さず繰出す鐘先を兩手にしつかと拜み請けて突共押共大盤石サ殿得と御傳授下さりませふ政右衛門感心／＼自然の立合に傳授を赦す過分さ大内記満足せり、又今日の致し方様子有んと窺ふところ心底に望み有てわざと我手練を隠し我を諷りし其趣、大内記承知致しておるわい。望みに任せ暇をくれるぞ。ハアコリヤマア持、コレ此刀は手覺の不動國行敵討の鑑別ではない暇の印ハア不動の文字は動かず動ぜず本意達する吉端の御賜、有難く頂戴仕るでハアハアござりますム、孟くれよハア政右衛門いつは成ず共今日は一つ呑やれハア看くれふ、一挺の弓の勢ひたり。東西南北の敵を安く亡せりハハハハ、目出度出立

く、ハア行きやれハアと答へて政右衛門其儘御前を立か弓未世に武士の鑑ぞと今の世までも傳へける。

沼津里の段

M 東路も爰も 三下りうたな高き沼津の里、富士見白酒名物を、一つ召せ召せ駕籠に召せ、おかごやろかい参らうか、おかごおかごと稻叢の蔭に巢を張り待ちかける蜘蛛のならひと知られたり。浮世渡りは様様に草の種がや人目には、荷物もしやんと共廻り、泊りを急ぐ二人連れ、立場と見かけ立止り 詞コレハしたり大事の用をとんと忘れた、大儀ながら私が寄つた所まで、一走往て来てたもと、急ぎの用事走り書、さらさらと書認め、早うくと手に渡せ

ば、主に劣らぬ達者もの、心安兵衛逸散に、元來し道へ引きかへす。稻叢の蔭より 詞旦那申、お泊りまで参りませうかい。申旦那様、何卒持して下さりませ、今朝から一文も銭の顔を見ませぬ、どうぞお慈悲。といひかけられ 詞イヤくわしは今夜は夜越に行く、サそこがお慈悲で御座ります。と頼みかけられ是非も無く 詞サそんなら吉原まで何ぼぢや。エ、おまへ様も、私が頼んで持つぢやもの、えい程に下さりませ。サそんならやらしやれ、年寄のよしにせいでそんなら持たして下さりませ。チエ 忝ないサアお出でなされませヤツト任せば聲ばかり、一肩往いては立留り 詞アノけふは結構な天気ぢやな、アヤツトまかせ二肩往いて

は息を繼ぎ 詞旦那申、向ふの立場に鱧の名物が御座ります、ヤツトまかせと山崎杖する度に追従口合深田に下りし白鷺の、餌ばみをするに異ならず、見るに氣の毒 詞親仁殿ちつと持つてやりませうかア、それく危ないく、イエく勿体ない勿体ない。ア、氣の毒な足元、最前から見て居るに、氣しんどでならぬこれはわしが足の癖でござります、旦那のお蔭で、けうも内入がようござります。モウこなたもいくつぢや七十に手が届いてござります。ア、ソレく合點の行かぬ足取。お氣づかひなされませな、若い時は小相撲の一番もとりました。ヤツトまかせとなア、といふ下道の爪先上り、氣の根つにまづきひよるひよる

詞ソレ見やしやれエ、きつい事をしたの、親指を蹴かいたかヨシ
早速に直してやる。と用意の薬取出し、付けると其儘、詞何とどう
ぢや、痛みは止るが。コレハ結構なお薬でござります、痛みはとんと直りました。サア、御出でなされませ。イヤコレ、荷はおれが持つてやる。ア、旦那様滅相な。イヤサ駄賃はやる。氣遣ひさしやんな、こなたの足元、最前から危なうて危なうて荷を持つ方がやつと氣樂な咄し、もつて行きませう、サア、ござれと先に立つ 三下り 平作は千鳥足合しんどが利になる蒟蒻の、砂に成るか
と悲しさに、小腰かゞめて、旦那様一肩やりませうかい。イヤ、是で大分歩きよい、マ、こなたの足元茶

めいた物ぢやの、その足取りを狂言師に見せたいわいの、亂れなど言ふて、傳授事に成りそうな事。イヤ旦那のおつしやる通り、大概亂れかゝつて居りますわい、ハ、ハ、ハ、道の伽する笑ひ艸、踏み分けて來る道草に、菊の折草持ち添へて、見合はす顔はと、様が詞およねぢや無いか、けふは結構な旦那の供したので荷は持たずにお世話になつた。お禮申してたも。コレハ、有がたい、もう爰がわたしが内、暫くお休み遊ばせと、昔の残り風俗も、お羽打枯れし松蔭に、伴ひ入るや西日影。わびたる中に二人住、門の柱に記しの笠、おかけなさるりや庭一杯いつそ座敷へマアお上りと、親仁が馳走娘の愛、前垂の藍薄くとも、マアお茶

一つと差出す、こぼれかゝつた薬屋葺、折悪う湯もわかず、水でなりおみあしを詞、イヤ、もう行きまする、扱娘御はよい器量、不躰ながら此内には、せまなげに咲いた杜若よい床へ生けたいのう。ハイどなたも左様におつしやります、自慢で作つて置きましたれど、近頃は手入れが悪きに、いこふ田地が荒れました何が身に構はず、賃仕事、貧乏は苦にもせず、それにそれは孝行にしてくれます、それで私が年寄つての蜘蛛助も、せめて三文など肩休めと、餘りあれがいぢらしさで御座りますコレと、様初めてのお方に、其様なさもしい咄を。ホンにさうぢや、ハ、イヤおよね、けふは大きな怪我をしてな、コレ、是見よ、爪

が起きてある、ア、薬もあれば有るものぢや、あなた様の薬きつい妙薬ありや何と申す薬で御座りますへ。此薬は大切な物、第一金瘡では此場で治る妙薬、武家方には尋ねれども、金銀づくでは手に入らぬ妙薬、と語れば娘は猶ほたゞ詞とゞ様の命の親、一日や二日で御禮は云ひも盡されず、ならう事なら今宵は爰に逗留遊ばして詞マ、娘何云ふぞい、こんな内に泊まして、着は干鬪が一匹無し、虱より外あなたの方に付物は無い。イヤ、不自由は仕付て居ます、娘御があの方に、しなつこらしういはしやるので、どうやら爰に根が生へた、大事なくばいつそ泊めて貰ふかいと目の鞘抜けし商人も、上手な娘のもてなしに、ころりとな

ればお枕と、油氣は無い眞味の馳走これも一樹の笠舎り、尋ねる軒の目印當に内に入り詞、旦那是にござりますか、サお立ちなされませんか。ホ、安兵衛か、早かつた、そなたは其荷物を持って吉原の鍵屋で宿を取らや、日和が知れぬ早う行きや、雨具の用意は吉原の、鍵屋をさして急ぎ行く。跡見送つて十兵衛は詞コレ親仁殿此娘御より外にもう子供衆は無いかいの。ハイ此およねが上に、男の子が一人あつたれど、二つの年養子にやりましたが又其の親の手を離れ今は鎌倉の屋敷方へお出入、よい商人になつて居るとの噂、それ聞いてとんと思ひ切りました。ソリヤ又何故に。ハテ一旦人にやつたれば捨たも同然我子乍らも義理あるもの

今其俵が身上がよいとて、尋ねて行て箸かたし貰うては、人間の道が濟みませぬ、今出合ふてもあかの他人子と云ふは此娘一人。ム、それも尤も。其兄貴は今いくつ位ぢやの。ハ、イかうつ、恰度今年二十八、鎌倉八幡宮の氏地の生れ、母の名は豊と書付け、守袋に入れてやりました、その後このおよねを生んでかゝも相果て、即ちけうが命日で、孝行娘が水手向け、花の立て方ごろちやいて下さいませと、何心無き咄の合紋、一々胸にこたゆる十兵衛、思ひ合はせば覺えあり。扱は産の親父様、血を分けた我妹が貧苦の有様、有合はせた路用の金、なま仲親子と名乗つては、受けぬ氣質を何とかな、金のやりたい屈託に、胸を痛めて詞コ

レ親仁殿、何んと物は相談ぢやが、
此娘をわしに下されぬか。エ、奉公
にあげますのか。イヤテヤ未だ女房
のない男、利發な娘御、商人の嬢に
は極上々の羽二重地、得心して下さ
るなら、仕こしらへはこつちから、
旅商人のことなれば、よびむかへる
日限は、まだいつとも定められぬ、
嫁入りのこしらへ料、爰に少々持あ
はす、是をおいて行きます、得心
かいの、どうでござんす、コレ女房
面目無いが最前から、わしやこなさ
んに惚れたわいのと、しな付きかけ
ればついと退き詞と、様あの方もう
いなして下さんせ、いかい貧しう暮
して居るとて、あたまめすぎた阿呆
らしいと、打つてかはりし腹立顔詞
エ、たしなめ、よい女房と言はれる

が、何のそれ程腹が立つ事、我が器
量がよい故ぢやと、おりやうらしい
イヤ申あなただ様、よう御親切に惚れ
さしやつて下さりました、ぢやがこ
のおよねは、女房といふては、やら
れぬ譯がござります。ム、そんなら
御亭主があるのか、これは、イヤ
ヤ實は只今のはほんの座興、主のあ
る人共存せず、産相申した、眞平御
免にあづかりませう、コレ娘御、機
嫌直して貰ひましよアノ痛み入つた
お詞、ほんに思へば在所者を、おな
ぶりなさるを眞受けにして、お恥しや
とにつこりと、笑ひに心打解けて、
咄に紛れてすつぷりと、日の暮れて
あるに氣がつかなんだ詞三日月様が
上つてござる、宵月夜で月燈は入ら
ぬ、その明を伽にして、辻堂の雨舎

り、お客様もうちお休み、足延すと壁
につかへる奥座敷、ゆるりとちどま
つて、御寝なりませ、わたくしは此
臺所、コリヤ娘はそちらに寝い、且
那樣はお小さいけれど、時のはずみ
では、主のある池へふんどみなさり
よも知れぬ。用心には綱を張れぢや
今夜はおれが股引はいて寝や、寒け
れどあなたには、わしがどんざを裾
になと、追風もて来る鐘の聲、いと
しんくと聞へける。およねは一人
物思ひ、心にかゝる夫の病氣。我手
で介抱する事も、浮世の義理に隔て
られ、私の螢の消え残る、佛壇の灯
も細々と、嵐にふつと氣のつく娘詞
奇妙に治つたと、様のあの疵、今で
も敵の手掛りが知れてから、あの病
氣では思ひもよらず、ムと心で黙

頭づき胸むねを据すへ、灯ひの消きへたるは天てんの
 與あへ夫うの爲ためと拔は足あし差さ足あし探たり寄より、印いん
 籠かご取とり上あげ立た退たいく足あし、蹠つ音おとに目め覺あ
 ます重じゆう兵べい衛ゑい、思おもはず高たか聲こゑ、何なに者ものと、
 裾すそを捕とへて引ひき止とむれば、わつと泣な
 き入いる娘むすめの聲こゑ平へい作さくも惘むげりし、起あ上あつ
 ても眞まこと暗くらがり、およねくと云いひつ
 へさがす籠かごの埋う火ひ、附つ木きにうつし顔かほ
 見み合あはせ、娘むすめぢや無ないか。且また那な様さまが
 何なに故ゆゑに此こゝの有あり様さま。エ、何なんの因いん果ぐわで此こゝ
 様さまな情なさけ無ない氣きになつたそいやい、コ
 リヤ此こゝ親おやは其その日ひ暮くれしの者ものぢやけれど
 な、人ひと様さまの物ものもじきな盗ぬすもと云いふ
 氣きは出ださぬわいやい。エ、親おやの顔かほ迄まで
 穢けがし居あつたと、わつと斗はり泣なき居あ
 たる。重じゆう兵べい衛ゑいは氣きの毒どく顔がほ詞ことば金かね錢ぜにを取と
 つたと云いふでは無なし、是こゝには譯わけの有あ
 りさうな事ことと、問たずはれておよねは顔かほ

を上げ詞ことば恥ぢかし乍なら開ひらいて下くださりま
 せ、様さま子す有あつて云いひ交まはせし、夫うの
 名なは申まをされぬが、私わたくし故ゆゑに騷さわ動どう起おり、
 其その場ばへ立た合あひ手て疵あざを負おひ、一い旦たん本ほん腹はら
 有あつたれど、此こゝ頃ころは頻しばしばりに痛いたみ、色いろ
 々さまざま介かい抱ほう盡じんせども効こゝろ無なく、立た寄よる方かたも
 旅たびの空そら、此こゝ近きん所じよで御ご養よう生せい、長ながしい間かん
 に路ろ銀ぎんも盡つき、其その貢こうに身みの廻まり、
 櫛くし笄さき、まて賣う拂はひ、悲かなしい金かねの才さい覺かく
 も、男おとこの病やまひが治なしたさ、先ま程ほどのお
 咄はなしに、金かね銀ぎんづくでは無ないとの噂うわさ、
 燈とう火びの消きえしより、あの妙めう藥やくをどう
 がなと、思おもひ盡つくしが身みの因いん果ぐわ、どう
 ぞお慈じ悲ひに是こゝ申まをし、今いま宵よの事ことは此こゝ場ば切きり
 お年とし寄よられしお前まへに迄まで、苦くる勞らうをかけ
 し不ふ孝こうの罪つみ、けふは死しなうか翌あすの夜よ
 は、我われ身みの瀬せ川がはに身みを投なげんと、思おも
 ひし事ことは幾いく度たびか、死しんだあとでもお

前まへの歎なげきと一いち日にちぐらしに日ひを送おくる、
 どうぞ御ご慈じ悲ひに御ご了りょう簡かんと、東あづま育たまちの
 張はりもぬけ、戀こひの意い氣き地ぢに身みを碎くだく、
 心こゝろぞ思おもひやられたり。歎なげきのはし
 くつくんと聞き取る重じゆう兵べい衛ゑい詞ことばコ
 レ姉あね御ご、そんならこなさんは江え戸どの
 吉きち原はらで、全ぜん盛せいの松まつ葉は屋やの瀬せ川がは殿どのぢや
 の。ハイデモよう御ご存ぞん知ち。スリヤ瀬
 川せがは殿どのの夫うの爲ためにムウムウと心こゝろの目め算さん
 思し案あんを極ごくめ詞ことばイヤコレ太た夫ふ殿どの、夫うの
 手て疵きずを治なす藥くすり愈よしいば尤なほ、それ開ひら
 て進すすめたいものなれど、是こゝは人ひとの預あづか
 り物もの此こゝ事ことは思おもひ切きらつしやれ、今いまこ
 なた衆しゆんの咄はなしの通とほり、わしも亦またた恩おん
 を受うけた、サ、其その恩おんを請ねがけた人ひとの爲ため
 に、いづれの寺てらへも苦くるしうないが、
 石いし塔たつ一つ寄よ進すすんがしたいが、何なんと世よ話わ
 して下くださるまいか、夫それは御ご奇き特とく結けつ構こう

な寄進でござります、何時成り共御世話致しませう、私も來年は娘が年忌、勸むる功德俱に成佛とやら、是非お世話致しまするで御座ります。

どうぞ今度の下り迄、違はぬ様に頼みます。豫ての願ひに書付も、此内に委しうござると、金一包取出し詞コレ必らず頼んだぞや親子の衆最早夜明けに間もなし、随分無事に親仁殿と、立出れば平作も、必らず御下り待ちます。姉御さらばとばかりにて、心に一物荷物先へ、道を早めて急ぎ行く。跡に親子は顔見合はせ金取上げてコレおよね、詞随分大事に掛けておきや、夜明迄は間もある、其方も休みやと水入らず、見廻はす傍に落ちたる印籠詞ア、是は今の旦那のぢや定めて尋ねてござるで

有ると、云ふにおよねが手に取つて此印籠は何うやら覚えのある模様、ハテ合點の行かぬ、それが是かと能々詠め詞本にそれよ、是やコレ澤井股五郎が常々持ちし覚えの印籠、ハテ不思議なと平作も、金取出しよく見れば詞金子參拾兩、此書付は鎌倉八幡宮の氏地の生れ、雅名は平三郎母の名はお豊、コリヤコレ我子に付けて置いた書付。そんなら今のお方は、私が爲には兄様。オ、我が子の平三で有つたかい。

そんなら最前からの深切は、夫とは言はず此金を、買いでくれた石塔代不思議な縁と親と子は、暫し呆れて居たりしが、およねは印籠手に取つて、裾はせ折つて馳け出す詞コリヤ待て娘、コリヤどこへ。どこへとは

と、さん、此印籠を持つてゐる、その兄様は敵の手がより、追掛けて股五郎が、在家を尋ね志馬津様へ尤ぢや、尤ぢやが、われでは往かぬ、年寄つたれど此平作、理を非に擧げ言はして見せう、吾も續いて後から來い、どの様な事があつてもな、

必らず出なよ、敵の在家聞く迄は大事の場所木蔭に忍んで立聞きせい、必らずとも麁忽すな合點か、本海道は廻り道、三枚橋の濱傳ひ、勝手覚えし拔道をと、子故に迷ふ三惡道、轉げつ倒びつ走り行く。跡にはおよね身ごしらへ、續いて出でんとする所へ、折から來かゝる池添孫八詞瀬川様か、孫八殿好い所へござんした今夜爰に泊つた客で、敵の手筋が知れさうな、詮議の爲に吉原まで、と

ムさんが行かしゃんした。エ、忝
 ない、シテ其行先は、吉原まではよ
 も行くまい、何かの様子は道にて聞
 かんと、瀬川に續く池添も、足に委
 せて三重墓ひ行く。實に人心様々に
 町人なれ共重兵衛は武士も及ばぬ丈
 夫の魂、夜深に立ちし獨旅千本松に
 さしかかゝる。オオイ〜と杖を力に
 息すた〜詞申々且那樣ヤレ〜お
 早い足元。ムウ今呼んだはこなたか
 あはたどしく何の用、イヤ只今のお
 金を、お戻しに參じました。石塔料
 と名をつけて、大枚の金子參拾兩、
 其の日暮しの蜘蛛助に、下さるも譯
 がある、又た請けまするにも譯があ
 る、雖然此金を請けましては、去る
 人が立たぬ義理がござります、是を
 お返し申します代りに、あなたにお

頼みが御座ります、お開きなされて
 下さりませるか。ムハテ一夜さ泊るも
 何んぞの約束、様子に寄つて頼まれ
 まい物でも無い。と夕闇月夜の聲知
 るべ跡より窺ふ池添瀬川、片唾を吞
 んで開き居たる詞シテ其頼みの様子
 は。ハイ被仰つて下されませ、此印
 籠の主の在家を承はりたう御座り
 ます。これを尋ねて知りたいばかり
 に、様々の流浪致す人、夫故娘も廓
 を出て憂き艱難、是が知れると本望
 成就、娘につれて私までも、モー
 い、此上の悦びは御座りませぬ、貳
 拾や參拾の端た錢で、露命を繋ぐ私
 が、死ぬる迄安樂に、暮される程の
 參拾兩、其金銀にかへてのお願ひ、
 七十に成つて蜘蛛助が、魂に叶はぬ
 重荷を持ち、夫は未だ休みもする、

子の可愛といふ重荷は、寝た間も休
 まぬ一生の、苦痛を助ける薬の名、
 お前様に親御があらば、子故には愚
 痴に成る物ぢやと思召しやられて、
 願ひを叶へて下さりませ、コレ申且
 那樣。と血筋と義理と道分石、分け
 て血の緒の三界に、踏み迷ふこそ合
 道理なれ。親の心を察しやり詞ム、
 さう有らう。心底至極尤ぢやが、
 是ばかりは何うも言はれぬ、おれも
 頼まれた男づく、其方の人が大切な
 ら、此方にも亦大切、譬へ又た在家
 を開いても命がなくては本望が遂げ
 られまい、ソレそちの内に落し置
 いた、主の無い印籠の其妙薬で、疵
 養生達者になつた其上では、望みの
 叶ふ時節もあらう。親仁殿、サ左様
 ぢや無いかと、心の替匣、一重明け

ぬ重兵衛が情の詞、詞サ、夫程お慈悲のあるお方、逆もの事なら其薬の持主、イヤサコレ悪い合點、此薬の持主は、其病人とは大敵薬、參拾兩の其金、敵の恩を請けまいため、反したては無いかの、此持主の名を言へば、敵の薬で疵本復、恩を受けては眞逆の時、切先がなまらうぞや、猶且拾ふた薬にして、心置きなう養生さしたが、よささうに思はるゝと、聞いて平作感じ入り詞ア、さうぢやあつた、エ、御前様は恐ろしい發明なお人ぢやの、左様聞きましては、申様もござりませぬ、左様なら歸りましよ、旦那様おさらばと云ひつゝ、探つて重兵衛が、脇差抜きと腹へぐつと突立る詞ヤア、何んとした、何んとした、コリヤ自害か、何故に

誰を恨んで、勿体なやとろく、涙驚く娘、聲に手當る池添が、鳴音止むる響虫、草に食付泣く斗り。平作苦しき目を開き、詞おりや此方の手に掛つて死るのぢやわいの、ハテ、此方と己とは敵同士、志津馬殿の縁のある、此親仁を殺したれば、頼まれた此方の男は立つ、コレ、此上の情には、平作が未來の土産に、敵の在家を聞かして下されいの、外に聞く者は誰も無い、今死ぬる者に遠慮はあるまい、不思議に始めて逢ふた人、何うした縁やら我子の様に思ふ者何のこなたに引け取らず様なことこの親が、サア此親仁が致しませうぞ、是が一生の別れ、一生の頼み聞かずに死んでは、迷ひますわいの、コレ、拜みます、旦那様と、

子故の闇も二道に、分けて命を塵芥須彌大海にも勝つたる、誠の親に初めて逢ひ、名乗もならぬ浮世の義理孝行の仕納め、詞どこへ誰か聞いて居まいものでも無けれど、重兵衛が口から云ふは、死んで行く此方さんへの錢別、今端の耳によろ開かつしやれ、股五郎が落付く先は九州相良道中筋は參州の、吉田で逢ふたと人の噂、エ、忝ない、アレ聞いたか、イヤ誰も無い誰も無い、聞いたは此の親仁一人夫で成佛しますわいの、名僧智識の引導より、前生の我子に介抱請け、思ひ残す事は無い、詞早く苦痛を留めて下され、親子一生の逢ひ初めて逢ひ納め、親仁様、平三郎でござります。ア、兄かい、エ、顔が見たい、

顔が見たいはいやい。ヲ、御尤で
ござりますす。親父様。モウ御臨終
でござりますぞへ、御念佛を申され
ませヲ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀
佛。と唱ふる十年重兵衛か、
こたへかねたる悲歎の涙、始終うか
いふ池添が、小石拾ふて白刀の金、
合はす火影は親子の名残り、跡に見
捨て 三重別れ行く。



繪本太功記

尼ヶ崎の段

尼ヶ崎の段

中 竹本相生太夫

(豊澤廣一助
竹澤團六)

切 竹本津太夫

鶴澤綱造

人形

母 さ つ き 吉田小兵吉
妻 み さ ほ 吉田文五郎
嫁 初 菊 吉田扇太郎
眞 柴 久 吉 桐竹政龜
武 智 重 次 郎 吉田玉藏
武 智 光 秀 吉田榮三
加 藤 虎 之 助 吉田文二郎

この床本は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒の合作で寛政十一年七月十二日初日の豊竹座で上場されたのが初演、初演の折は發端より十三冊目まで上場されたのが後世何冊目と引抜いて上演されるに到りました、書卸し當時紋下の麓太夫が十冊目尼ヶ崎を語つてゐます。尼ヶ崎の段は十冊目で俗に『太十』といはれてゐます。光秀は小田春永から勘氣をうけ領地を召上げられたので反逆心を起し春永を本能寺に夜襲して殺したので久吉は高松城を水攻めの最中であつた

が主君の死を聞き和議を整えて光秀征伐に歸つて來た、光秀の母皐月は光秀の反逆を悲しみ廻國修業に出た。光秀も悔いたが四方田に勧められ、伴重次郎と共に久吉と戦ふことになつた。この尼ヶ崎の段は廻國に出たさつきの閑居であります。旅僧に身を篋して一夜の宿を態と乞ひ家の様子を探りに來た木下藤吉を光秀は刺すつもりで母皐月を刺殺してしまふといふのがこの段の内容であります。

(床本) 尼ヶ崎の段 (中)

南無妙法蓮華經 御法の聲も 娟し尼ヶ崎の片邊り誰住む家

と夕顔もおのが儘なる軒のつまあた
 り近所の百姓共茶碗片手に高咄しな
 ぶ婆様こな様も見た所が上方で歴々
 のお衆そふなが何の爲に面白もな
 いこの在所へはござつたぞいのア
 コレ／＼甚作そりやいやんな、京の
 町は武智といふ悪人が春永様を殺し
 て大騒動、大かた又下へ下つて居や
 しやる久吉殿が戻つて来て、武智と
 是非に一合戦なけりや濟ぬはいのふ
 そんなら年寄はうか／＼京の町には
 居られぬ、とかくあぶなげのない様
 に、こんな在所へ来て、居るが大で
 き／＼、時に近付がてら妙見講を勤
 るとはよい手廻し大きな馳走に逢ま
 した是から随分心安いたしませう

サア／＼いふと口々に言たいこと
 をたくしかけ、しやべり廻つて、歸
 りける、老母はつど／＼門送り庭の
 千草に打つ水も、たもつ葉毎に、風
 かほる軒を目當にくる人は武智が聞
 に咲く花の操の前は家來を遠ざけ、
 嫁の初菊件ふて窺ふ切戸の庭先に花
 に心を養ふ老母、それと見るより手
 をつかへ後室様の見舞として只今參
 上致せしと慇懃に相述る詞に老母は
 打笑み、ヲ、珍らしい嫁女孫女はる
 くの道よふこそ／＼さりながらせ
 がれ光秀當月二日本能寺にて主君を
 害せし無法者、同じ館に膝ならぶに
 も先祖の恥辱身の汚れと館を捨て此
 在所へ身退きし此姿を見舞とはおこ
 がましい善にもせよ悪にもせよ夫に

付が女の道操の前は武智重兵衛光秀
 が妻、そなたは又孫の重次郎光慶が
 嫁でないか生死別らぬ戰場へ趣く夫
 を打捨て浮世を捨てた姑に孝行盡す
 は道が違ふ妻城にとゞまつて留守を
 守るが肝要ぞや、モウやもめぐらし
 の楽しみに夕顔欄の下涼み捨つべ
 きものは弓矢ぞと言放したる老女の
 一徹、後は詞もなかりけり、常の氣
 質とさからはず、いかさま後室様の
 おつしやる通り此様に只お一人ござ
 つたら何もかも氣さんじてマア第一
 はお身の養生今から私も初菊も後室
 のお傍に居て飯も焚たり茶も沸しお
 宮づかへをせふぞいのと、ありあふ
 前垂襦の上に引しめ茶釜の傍、端

香のこもる姑のしぶく機嫌を取りかねる娘心に初菊もマどふ濟事か濁り井の深き奇縁の釣瓶繩水汲み上げんと立寄れば、コレく嫁達シテ孫重次郎は城に残て居めさるか、さればでござります、重次郎が願ひにはどふぞけふの軍に高名手柄があらはしたいと父上までは願ひしかど、婆様のお赦しなきに出陣するも本意でなし、母に取次してくれと、くれくれの願ひ故餘り健氣さ祖母様に御機嫌の程いかゞぞと窺ひに参りましてと語る内老母は涙をはらくと流し、ヲうらうらぎの嫁がもの語り、主を討たる逆族の邪非道の軍の評定聞かがいやさのこの住居が又孫をほめるではなけれ共非道な伴光秀が子に重次郎といふ武士が生れてくれる

とは是も因縁、悔んで、返らず、戦場の事聞きたふないア、いや、情けなの浮世やと、無量の思ひ百八の數珠つまぐつて居たりける、折ふし表へ草鞋がけ風呂敷背にいつきせき蛙飛込道野邊の清水むんばん夏の旅西方もどきの僧一人、門口に立休らひ諸國修行の一人旅、近頃申し兼たれど御宿の報謝に預りたし押付ながらと言入る聲を老母が聞取て、見苦しうござりますれどお心おきなふ御一宿、それは千萬忝い左様ならば御遠慮なしに御免くと上り口、腰打かくれば二人の女、草鞋の紐を解かゝればア、勿体ないく構ふて下さりますな、旅仕つけた坊主の氣さるんじ、木納家の隅でもついでころり蚊帳も蒲團も入ませぬ、お心づかひ御

無用と、詞半へ表口、人目を忍び只一騎窺ひ立聞く武智光秀心得がたき旅僧と、生垣押分けさし覗き思はず見合す母の顔老母は何か心にうなづきヲ、わしとした事が心の付ぬコレ御出家様此板圍ひが則ち風呂場、水は幸ひくんであり、ついでや、ともやして、あつい時分じや行水して休んで下さりませ、婆も後で相伴しませふ、マ、イヤそれには及びませねど相伴とあれば沸しませう、そんなら御免なされませふと包み引さげ氣さんじに、湯殿をさして入にける、味方の軍卒兩手つき、御子息重次郎光慶様後室様に御願ひの筋ありと只今是へ御越といふ間程なくしづくと家來に持せし鐵櫃かき入れさせて打通りコレヤく者共そち達

に用事はない、陣所へ早くとおつ立
 やり、威儀を正して兩手をつき母様
 をもつて御願ひ申せし出陣、御聞き
 届け下されなば、武士の本意と重次
 郎思ひ込でぞ願ひける、老母は見る
 より、機嫌顔ヲいめづらしい重次郎
 出陣の願ひとな、悴を見限り此所へ
 身退きしに叮嚀な願ひの筋最前嫁女

にくはしう聞きました。とても出陣
 仕やるなら婆が願ひはこの初菊、今
 宵此家で祝言の盃してから門出し
 や、何と嫁女嬉しいかと、老の詞に
 初菊は飛立つばかり氣もいそ／＼心
 の悦び穂に出る顔は上氣の夏楓色も
 なまめくばかりなり。只黙然と重次
 郎けふ初陣に討死と覺悟極めしこの
 体、お暇乞に参りしと、知らせ賜は
 ぬ悲しやと涙呑込忍び泣操の前も立

上りば、様の御機嫌のかはらぬ内に
 かため、盃、ヲ、それ、孫も大か
 た心せき操は九献の用意しや、重次
 郎が初陣の鎧の役はすぐに花嫁、三
 國一の悲しみと知らぬ白齒の孫嫁が
 手を引連れて三人は奥の。

(床本) 尼ヶ崎の段 (切)

一間に入りけり。残る蒼の花一
 つ、水上かねし風情にて、思案投首
 しほるばかり、やう／＼涙押とゞめ
 母様にもば／＼様にも、これ今生の
 暇乞ひ、此身の願ひ叶ふたれば、思
 ひ置く事更に無し、十八年が其間御
 恩は海山代難し、討死するは武士の
 習ひと思召し分られて、先立つ不幸
 は赦してたべ。二つには又初菊殿
 未祝言の盃をせぬが、互ひの身の

仕合せ、わしが事は思切り、他家へ
 縁付して下され、討死と聞くならば
 さこそ歎かん不愍やと、孝と戀との
 思ひの海、隔つ一間に初菊が、立開
 く涙轉び出で、わつとばかり泣き出
 せば、はつと驚き口に手をあて。
 アイコレ、聲が高い初菊殿、扱は
 様子。アイ、残らず聞て居りまし
 た、夫の討死遊ばすを、妻がしらい
 で何とせう二世も三世も女夫ぢやと
 思ふて居るに情ない、盃せぬが仕
 合せとは、あんまり聞えぬ光義様、
 祝言さへもすまぬ内、討死とは曲が
 ない、わしやなんぼうでも殺しはせ
 ぬ、思ひ留つて給はれと、すがり歎
 けば。アイコレ此方も武士の娘ぢ
 やないか重次郎が討死は豫ての覺悟
 ばと様に泣顔見せ、もし悟られたら

ばと様に泣顔見せ、もし悟られたら

未來永々縁きぞや。エ。サア、とかふ云ふ内時刻が延る。其鎧櫃愛へ愛へ、アイ、サ早う、時延びるほど不覺のもと、聞譯ないとしられて、いとしい夫が討死の、首途の物の具つけるのがどう、急がるゝ物ぞいのと、泣くゝ取出す排絨の、鎧の袖にふりかゝる、雨か涙の母親は、白木の土器自髪のは、長柄の鏡子、蝶花形首途を祝ふ鬘斗毘布、結ぶは親と子手脚當、六具かたむる三々九度。合此世の縁や割子札、猪首に着なす鋏形の、あたりまばゆき出立は、さわやかなりし其骨柄。オ、天晴れ武者振いさまし、功名手柄見る様な、祝言と出陣を一緒の盃、サアサア早う、目出度いゝ嫁御寮と、悦ぶ程猶いや増す名残り

こんな殿御を持ちながら、これが別れの盃かと悲しさ隠す笑ひ顔、随分お手柄功名して、せめて今宵は凱陣をと、後は得云はず喰ひしぼる、胸は八千代の玉椿、散りてはかなき心根を、察しやつたる重次郎、包む涙の忍の緒。しぼり兼たるばかりなり。哀を爰に吹送る、風が持てくる攻太鼓、氣をとり直しつゝ立上り。いづれも、さらばと言ひ捨て、思ひ切つたる鎧の袖、行方知らず成にけり。ノウ悲しやと泣入る初菊、母も操も顔見合せ。ば、様、嫁女、可愛やあつたら武士を、むざゝ殺しにやりました、なる初菊、重次郎が討死の出陣とは知りながら、なま中留めて主殺しの、憂死恥をさらさうより健氣な、討死させん爲祝言によ

そいへ盃さしたの、喉乞やら二つには、心残りのない様と、思ひ餘つた三々九度、婆が心のせつなさを推量しやとばかりにて、初めて明かす老母の節義、きく初菊も母親も、一度にどつと伏轉び、前後不覺に泣叫ぶ、襖押し明け何に氣無う、つかゝ出づる以前の旅僧、コレゝかみ様、風呂の湯が沸きました、どなたぞお遣入りなされませと、云ふにこなたは、泣顔かくし。オ、それは御苦勞去りながら、年寄は新湯は毒後は若い女共、マアお先へ御出家から。いかさま、湯の辭義は水とやら、左様ならば御遠慮なく、お先へ參る、と立上れば、三人は涙押包み奥の佛間と湯殿口、入るや月もる片びさし。爰に苅取る眞柴垣、夕顔柵

のこなたより、現はれ出たる武智光秀。必定久吉此内に、忍び居るこそ屈竟、只一討と氣は張弓、心は矢竹籠垣の、見越の竹をひつそぎ槍、小田の蛙の啼音をば、とどめて敵に悟られじと、拔足差足、窺ひより、聞きゆる物音心得たりと、突込む手練の槍先に、わつと魂ぎる女の泣聲、合點ゆかずと引出す手負、眞柴あらで眞實の、母のさつきが七轉八倒ヤアこは母人が、しなしたり、残念至極とばかりにて、流石の武智も仰天し、只茫然たるばかりなり。聲聞付けてかけ出る操、初菊諸共はしり出で、ノウ母様が情けない、此有様は何事と縋り歎けば目をみひらき歎くまい、歎くまい、内大臣春永と云ふ主君を書せし武智が一類、か

くなりはつるは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名を穢す、不幸者とも悪人とも、たとへがたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて功名顔、たとへ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、おとりしとはしらざるか、主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たばもうそら飯の切米も、百萬石に増るぞや、おのれが心只一つで、しるしは目前これを見よ、武士の命を斷つ刃も多いにこのやうな、ひつそぎ竹の猪突槍、主を殺した天罰の、報ひは親にも此通りと、槍の穂先に手をかけて、ゑぐり苦しむ氣丈の手負、妻は涙にむせ返り、これ見給へ光秀殿、軍の首途にくれんも、お諫め申した其時に、思ひ留つて給はらば

かうした歎きはあるまいに、知らぬ事とは云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すと云ふはエ、マ、何事ぞいの、せめて母御の御最後に善心に立かへると、たつた一言聞かしてたべ、拜むわいのと手を合はし、諫めつ泣い一つ筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鏡雲りなき涙に誠あらはせり。光秀聲あらゝげ。ヤア猪小才な諫言立、無益の舌の根動すな、意恨を重ねる小田春永、勿論三代相恩の主君でなく、我諫を用ゐずして、神社佛閣を破却し、惡逆日々に増長すれば、武門の習ひ天下の爲、討取たるは我器量、武王は殿の紂王を討ち、北條義時は君を流し奉る、和漢俱に無道の者を虐ぐるは、民をやすむる英傑の志、女童の知る事

ならず、すさり居らうと光秀が、一心變せぬ勇氣の顔色、取つく鳥もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓、耳をつらぬく金鼓の響き、あはやと見るや表口、數ヶ所の手疵に血は瀧津瀬、刀を杖によるぼひく、立歸つたる武智が一子、庭さきに大息つぎ親人これにおはするや、云ふも苦しき斷末竈、見るに驚く母親より、娘は傍に走り寄り、のういたわしや重次郎様、祖母様と云ひお前迄此有様は情けない、お心たしかに持つてたべ、やいのくんと取付て、介抱如才泣くばかり。光秀わざと聲あらゝげ。ヤア不覺なり重次郎、仔細は何と、様子はいかに、具に語れと呼はれば、はつと心を取直し。親人の差圍にまかせ、手勢すぐつて三千餘

騎、濱手のかたに陣所をかため、今や歸國と相待つ所に、敵はそれとも白浪の、櫓を押切つて陸地に漕付けおいく都へ馳せ登る、眞柴が軍勢ござんなれと、圍をつくつて味方の軍兵、縦横無盡に薙立つれば、不意を打たれて敵は敗亡、狼狽騒ぐを追詰め爰をせんど、戦ふ中後の方より大音聲、眞柴築前守久吉の家臣加藤正清これにあり、逆賊武智が小童共目に物見せてくれんと、いふより早く大刀抜かざし、四角八面に切立られ、またまく間に味方の軍卒、殘らず討死仕り、無念乍も只一騎立歸つて候と、息つきあへず物語れば、光秀怒りの髪逆立て、ヤア云ひ甲斐なき味方の奴原、シテ四方天田島守は、さん候四方天は目ざす

は久吉一人と、昨朝よりの一騎がけ亂軍なれば生死の程も、慥にそれと承らず、親人の御身の上、心にかゝり候故、未練にも敵を切りぬけ、これまで落延び歸りしぞや、此所に御座あつては危ふしく、一時も早く本國へ引取り給へ、サ早くくと、深手を屈せず父親を、氣つかう孫の孝行心、聞くに老母はせき兼て、アレあれを聞き嫁女、其身の手疵は苦にもせず、極悪人の忤めを、大事に思ふ孫が孝心、やい光秀子は不慙にはないか、可愛いとは思はぬかやい、おのれが心只一つで、いとし可愛の初孫を、忠と義心に健氣なる、討死でもさす事か、逆賊無道の名を汚し、殺すはなんの因果ぞと。せぐり苦しき老の身の、聲聞きつけて重

次郎。ヤアそんなら祖母様には、御生害遊ばしたか、今生のお暇乞今一度お顔が見たけれど、モウ目が見えぬ、父上母上様、初菊殿、名残惜やと手を取つて、妹春の別れ愛着の、道にひかるゝいちぢらしさ、母は涙に勿体なく、討死するも武士の習ひといへど情けない。詞十八年の春秋を刃の中に人となり、いつ樂しみの隙も無う、弓矢の道に日をゆだね、今日的首途の其時にも、母様今日の初陣に、天晴れ功名手柄して。父上やばゝ様に、響らるゝのが樂しみと、につと笑ふた其顔が、わしや幻にちらついで、得忘れぬとくどき立てくどき立つれば初菊もほんに思へば此身ほど、はかない者が世にあらうか、解けて逢ふ夜のきぬゝも、永

き名残の許嫁、二世を結ぶの枕さへかはす間もなう此様な、悲しい別れをする事は、マどうした罪か情けない、私も一緒に殺してたべ、死にたいわいのと身をもだへ、互ひに手に手を取かはし名残涙のいとま乞ひ、見るに目もくれ情消え、母も老母も涙をあげ、わつとばかりに取亂せば流石勇氣の光秀も、親の慈悲心子故の闇、輪廻の絆にしめつけられ、こたへかねてはらくはら雨か涙の汐境浪立ちさわぐ如くなり。又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲かまびすくM手にとる如く聞ゆれば、光秀聞よりつゝ立ち上り。アノ物音は敵か味方か、勝利いかにと庭さきの、拗木の松ケ枝踏しめゝよち登り、眼下の村手をきつと見くだし。和田

の岬の弓手より、追々つゞく數多の兵船、間近く立つたる魚鱗の備へ、千生瓢の馬印は、疑ひもなき眞柴久吉、風を喰つて此家を逃げのび、手勢引具し光秀を、討取るてだてと覺えたり。と云ふより早くひらりと飛下り、草履擲みの猿面冠者、イデートひしぎと身繕ひ勢ひ込んでかけ出せば。ヤア武智光秀暫く待て、眞柴筑前守久吉、對面せんと呼はつて、三衣にかはる陣羽織、小手脚當も優美の骨柄、悠然として立出れば、光秀見るより仰天し、駭戻つてはつたと睨み。ヤ、珍らし、眞柴久吉、武智十兵衛光秀が此世の引導渡してくれん、観念せよと詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の子故に手疵屈せぬ老女ノウ久吉様我が子に代るこの母も、

天命のがれぬ引そぎ槍、つくきり罪の萬分一、亡る事もあらうかと、思ひ餘つた此最後、武智が母は逆礮付に、懸つて無惨の死を遂げしと、末世の記録に残してたべ、それも矢張り忤めが、可愛さ故の罪亡し。うるさの娑婆に残らんより、孫と一緒に死出三途、ハア私もお供いたしまするいづれもさらば、おさらばと、未練残さぬ武士の花も實もある此世の別れ、今ぞはかなくなりけり、操の前も初菊も更に詞も出でばこそ、あへ亡骸を押動かし、天に懂がれ地に伏して、歎く心ぞいぢらしき、哀を餘所に眞柴久吉、光秀に打ち向ひ俱に天を戴かぬ亡君の弔ひ戦、今此所で討取つては、義あつて勇を失ふ道理、諸國の武士に久吉が軍功を知

らさん爲、時日移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべし、がいかにか、オ、流石の久吉よく云つたり、我も惟任將軍と勅許を受けし身の本懐、一トまづ都に立歸り、京洛中の者共へ地子を許すも母への追善、互ひの運は天王山、洞が峠に陣所を構へ、只一戦にかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ、ホ、ホ、ホ、何さ、たとへ項羽が勇ありとも、我又孫吳が秘術をふるひ、千變萬化にかけなやまし、勝鬨上るは瞬く中と久吉が詞はゆるがぬ大磐石、忽ち廻り小栗栖の、土に哀を残すとは、知らず知られぬ敵味方、睨み別る二人の勇者二世をかためたの別れの涙、かゝれとしてしもうば玉の、其黒髪をあへなくも、切拂ふたる厄ヶ崎、菩提

の種と夕顔の、軒にきらめく千生瓢箪、駒のいなゝき迎ひの軍卒、見渡す沖は中國より、追々入來る數萬の兵船、威風凜々凜然たる、眞柴が武名假名書に、寫す繪本の太功記と、末の世までも三重に残しける。



由良凌千軒長者

山の段

(床本)

山の段

安壽 姫 竹本小春太夫
 對王丸 豊竹つばめ太夫

鶴澤友次郎
 豊澤仙糸

人形

安壽 姫 桐竹紋十郎
 對王丸 吉田扇太郎

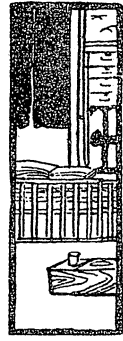
うた人の、三十一もじの種となる。
 由良の湊の風景は筆に及ばぬ詠述ま
 だとけやらぬ谷の戸の雪をさそへる
 驚の聲に春をぞ向へける。淨世とは
 いつの淨世に始りし其うき事の身に
 つもる對王丸、安壽の姫人、商人に
 かどはかされ三庄太夫が手に渡りし
 づが手わざの鎌扱汐汲桶のおもきよ
 りおもき思ひの父母に死での別れ生
 別れ日毎の別れ姉弟か涙の種や別れ
 が辻、エ、申し姉様、今日は尙しも
 お顔のやつれ。お心悪ふござりませ
 ぬか、とと様にも母さんにもお前一
 人を力草わづらふてばし下さんすな

と、くどけば姉も打しほれ、姉弟
 なりやこそ其れに姉を大事にかけて
 たもるコレよふききや、毎夜の
 折檻が病にならいでなんとせう奥州
 五十四郡の主、判官殿の忘れがたみ
 といはるゝ身が淨世をしのぶ忘れ草
 といやしい業の下主奉公、毎日
 三前の汐、きのふはしづに助けられ
 敷を合せし夕べのしぎ、今日はたれ
 が助けてくれふ。サア山へ行きや己
 しも一所にしばからふサア、おじ
 やと先に立行けば袂に取りすがり姉
 様わしと山へいてお前の汐はたが汲
 ます。人に汲で貰ふてさへ、ぶち打
 擲の棒さんはいつらい苦しい艱難も
 姉弟一所に居ればこそ辛抱も成りま
 する、ひよつとお前の身の上にもし
 もの事が有たらば詞わしやなんとせ

うどうせうぞサア濱へお出遊ばせ、
わたしもともに汐汲ふ詞ヲいふい
ふてたもつたのふ、自は女子の事そ
もじは大事の殿様の子、姉にかまは
ず山へいきやイエ／＼わたしがイヤ
わしがと争ふ思ひ血筋のしんみなく
／＼しぼる袖袂對王丸は鎌追取り自
害と見るより取すがり氣がちがふた
かコレ弟、何故死るともぎはなす。
其手を取てコレ姉様何故とは聞えま
せぬ、お乳や、めのとに侍れたる姉
弟が今は寒夜のあらむしろ、いやし
い土民に踏れたりたゝかれたり口惜
しい共無念な共名字のけがれ我身の
はぢ姉様殺して下さんせヲ、道理ぢ
やもつともじやわいのふ、扇の橋の
うきなんぎ力と頼む要もちり／＼、
後は足弱追手のあやうさ救ふてくれ

ると思ひの外、兄弟のみか母様迄。
人買に賣り渡され有ふ事かあるまい
事か世にも稀なる此里の三庄大夫が
どうよく心、賣渡されし憂き、つら
さ。おいとしや母様の何國にござる
か知らねど朝夕、行時も二人が事、
思ひ暮し泣くらし、さぞなつかしう
思ふてござるコレ親子は一せ死で未
來であわるればつれない命、生ては
居ぬとくどきたつれば弟もなんぼあ
をうと思ふてもどこを尋ねるしやう
どもなし、ましておよわい生れ附涙
の種が病となるもおかくれなされた
ら生て甲斐なき世の中に死にも死れ
ぬ姉弟を神や佛もこれ程迄、みすて
たもふか恨めしやと互にひつしと抱
付前後正体泣沈む心ぞ思ひやられた
り、いつ迄いふても返らぬこと逐ふ

ては又難儀そなたも山で柴仕業、姉
も濱へ行きます程にけがせぬ様にし
てたもやアイそんならおまへもけが
せぬやうに頼む／＼と泣別れわかれ
が辻を右左一足いては立どまり坂へ
かゝればコレ對王まだ四方山に残る
雪手足がごとへてたまるまい必ず木
の根につまづいて谷へ落ちてたもん
なやといふも次第に遠ざかりヲい
／＼と姉弟が同じ思ひに引足の姉さ
ま汐にさそはれて流れてばしたまは
るなど顔見ゆるまで延上り呼べど叫
べど山彦の音はこだまか松の風吹は
らひゆく汐衣、姿隔るゝ春霞、涙な
がらにたどり行く。



攝州合邦辻

合邦内の段

合邦内の段

竹本 鍛太夫
 豊澤 新左衛門
 竹本 大隅太夫
 鶴澤 道八

人形

親合邦 吉田 榮三
 合邦女房 吉田 玉七
 玉手御前 吉田 文五郎
 俊徳丸 吉田 文作
 浅香姫 吉田 光之助
 奴入平 吉田 玉市

この『攝州合邦辻』は安永二年二月北堀江座の正本として菅專助、若竹笛躬が合作したるもので、元禄七年竹本義太夫正本『弱法師』の改作であります。上下二段より成り、上の段は住吉で玉手御前が、俊徳丸に毒酒を進める所、高安館の僞勅使、俊徳丸國遠、繪旨取戻して下の段は天王寺西門閻魔王建立滑稽勸化、合邦内の段であります。書卸し當時合邦内の段の切は豊竹此太夫が語つてゐますが、永らく上場を禁ぜられてゐましたので名作も世に出なかつた

のですが、その禁も解かれて大正十四年十月の御靈文樂座で初演しました。内容を申上げますと、合邦の娘お辻は氏無くして玉の輿、藤原通俊といふ公卿の奥方玉手御前と出世した、通俊には先妻腹の嫡子俊徳丸と外戚腹の次郎丸といふ二人の息がある。次郎丸は壺井平馬等と心を合せて俊徳丸をなきものにして家督を奪はんと計ります。玉手御前は義理ある子の俊徳丸に身も世もあらぬ無慮の横戀慕をします朝香姫といふ美しい許嫁があるので嫉妬して俊徳丸に毒酒をすゝめて業病にかゝらせます。俊徳丸は家出して天王寺の非人小屋に籠つたが朝香姫が訪ねてゆき手を

携へて合邦の家へ行く」と其處で計ら
ずも玉手御前と落ち合ひます。合邦は
娘の不倫の戀を怒つて我が及にかけ
ますと玉手は始めて眞實の底意をう
ち明けます。俊徳丸に戀慕と見せた
は計略で悪者等の爲に一命も危ない俊
徳丸を助けやう爲であつたのです。
卑しい女から玉の輿に乗せられた夫
への報恩と繼子への義理立とであり
ます、玉手御前は寅の年月揃つた女
で、その臍の生血を絞つて飲ませ
ると俊徳丸の業病も忽ち治るといふ
人口に噂された物語であります。

(床本) 合邦内の段 (中)

願以此功德鈺の音山が回向の申上り
萬遍の同行中座並上下の差別なく心
安居の岸はづれ合邦夫婦が志速夜

の料理そこ／＼に氣輕手輕の給仕こ
そ心一ぱい馳走なり講中一番はしや
き口せんべ屋の植右衛門杉箸片手に
しやにかまへテ、奇特によぶ勤めさ
つしやるの見れば新しい戒名も張て
有と炬燵のやぐらやあぶりこの様な
角な字ばかりで一つも讀ねど此様に
味い事拵らへて講中を呼しやるから
はどふで身内の佛でござらふ誰じや
知らぬが頓生菩提と念佛に汁菜かみ
まぜて蓮池のはぜやの婆イヤコレ合
邦殿志の佛が有と聞た故今夜の念
佛は我一と精出したでいつもとは夜
食も格別麥飯にとろゝじる飛龍頭の
平こんにやくの白あいではいかな亡
者もずる／＼と極樂へすべり込しや
り／＼佛にならしやると言も馳走の
追従口主合邦取つくるひイヤモ今夜

の百萬遍はちつと遁ぬ亡者への手向
國を隔てくらす故命日も知らずそれ
で戒名も手作りで大入妙若大姉と付
て置た御存じもない佛に御苦勞をか
けまする即ち是が逆縁の成佛心ばか
りのほんの茶漬何もなくと御酒も三
献よふまいつて下されと夫が挨拶女
房は目には涙のふくみ聲久しう顔も
見ず死目にさへも得逢ぬむごい別せ
めて未來を佛に御苦勞かけての百
萬遍よふこそ參つて下さりましたサ
ア／＼なるもならぬもかく三でと後
の盃めん／＼にヲツト有／＼こぼる
ゝと夫婦がしいぶん大分にコリヤた
べ過た満腹と膳は取れてもうつむい
て辭宜さへならぬ腹撞梅いかい御雜
作御馳走と禮もそこ／＼同行共皆打
連れて立歸る後に女房は御明しの灯

（床本） 合邦内の段（切）

しん／＼たる夜の道、戀の道には暗からね共、氣の鳥羽玉の玉手御前、俊徳丸の御行方、尋ねかねつゝ人目をも、忍び兼ねたる頰冠り、包みかくせし親里も、今は心の頼みにて、馴れし古郷の門の口、立寄る後より入平が、御兩所の御行衛、爰とは開けど奥方の、姿見るより様子もと、戸脇にあつき藪疊、身を潜めてぞ窺ひ居る、かくとはしらで玉手御前、ひわれに洩るゝ細き聲、かゝ様、かゝ様と、呼ぶは髓に娘の聲、ヤア、わりやまだ死ぬな、殺ささりやせぬかと、立上りしが心付き、振り返り見る女房の方、鉦に紛れて聞えぬは、ヤこれ幸ひと素知らぬ顔、

かゝ様、かゝ様爰明けてと、叩く戸の音聞き咎め、コレ合邦殿、今こな様何とぞ云ふてか、イヤ何共云やせぬ、そりや空耳であるぞいの。イヤ、空耳かは知らね共、ちらりと聞えた娘の聲、ハテ合點の行かぬと立上る、そう仰有るはかゝ様か、ちやつと明けてくださいんせ、辻でござんす戻りましたと、聞いて惘り、ヤア、戻つたとは夢ではないか、まめであつたか嬉しやと、かけ出る裾を取つて引とめ、ヤイ／＼／＼狼狽もの、肌はふれてもふれいでも、我子に不義をしかけた畜生、侍の身に高安殿が、助けおかしやる様なければ、何の今迄存命で、うかく／＼爰へ何にしにこうぞい、ア、隠すより願はるゝはなし、親はないと云は

してもある事知つて、娘が手から度々の合力金、二人が命を養ふたは、皆高安殿の御厚恩。其の夫の目をかすめ、畜生の心さげた娘、譬へ無事で戻つたとて、門ばたも踏まされうか元來娘は斬られて死んだ。が今もの言ふたが娘なれや、夫こそ幽霊、そなた氣味が悪うはないか、肉縁の深い程、死人になれば恐いもの、必ず門の戸明けまいぞと、云ふに女房はイヤ／＼／＼、幽霊は愚か、狐狸の化けたのでもま一度見たい娘が顔もしや恐ろしいものであつて、目を廻して死んだら仕合せ、いとし可愛い子を先立て、生きて業をさらそうより、一と目見たいと振切るを、猶引とめて、ハテ扱て悪い合點じやわいの、狐狸か幽霊なればまだしも

もし誠の娘なら高安殿へ義理の言譯
 以前は刀を差した役、親の手にかけ
 殺さずにやらぬ、それがいやさに留
 めるのぢやと泣かねど親の慈悲心を
 聞く子や妻は内と外、顔と顔とは隔
 たれど、心の隔泣寄りの、眞身の誠
 ぞ哀れなる、娘は涙押し拭ひ、門の
 戸口に口を寄せ、父様のお腹立、お
 憎しきは御尤これには段々言譯あれ
 ど、人目を忍ぶ此身の上、マア爰明
 けて下さんと、泣く／＼願へば母
 親は、アレ聞いてか合邦殿、言譯が
 あるといのママ聞いてやつて下さん
 せ、ハテ娘と思へば義理もかける、
 幽霊を内へ入れるに、誰に遠慮もあ
 るまいぞへア、いかさまのう、此世
 をはなれた者なれば、世間を憚る事
 もないそんなら早う呼込んでソレ茶

漬でも手向てやりや／＼、可愛や立
 寄る所はなし、幽霊も嘸ぞひたるか
 ろと、身を背けるは泣く百倍、母は
 悦び門口の、戸しやおそしと開く間
 も、おなつかしやなつかしや。と縫
 る娘の顔形、前後見つ肌に入
 ても矢張りほんの娘、嬉しやまめで
 るたかいの。然とは知らいで逆様事
 あたいま／＼しい百萬遍、弔ひした
 夜に無事な顔、ひよつと夢ではある
 まいかと、抱きしめ／＼嬉し泣き父
 もほどふる娘が顔、見たさに思はず
 立寄れど、以前の詞と世の義理を、
 思へばちやつと飛退いて、手持悪い
 ぞいちらしき、母は漸う心を鎮め、
 世間の噂にはの、そなたは、アノ
 俊徳様とやらに戀をして、館を抜け
 て出やつたの、イヤ不義ぢやのと悪

ふ云へど、そなたに限り、よもや
 ／＼さう云ふ事はあるまいの、嘘で
 ある／＼。嘘か／＼と箸持つてく、
 める様な母の慈悲。
 面はゆげなる玉手御前、母さんのお
 詞なれどいかなる過去の因縁やら、
 俊徳様の御事はねた間も忘れず戀こ
 がれ思ひあまつて打付にいふても親
 子の道を立て、つれない返事かた
 程猶いやまさる戀の淵いつそ沈まば
 どどこ迄もと後をしたふて歩はだし、
 あしの浦々難波がた身をつくしたる
 心根を不便と思ふて俱々に俊徳様の
 行衛を尋ね女夫にして下さんすが親
 のおじひと手を合せ拜みまはれば母
 親も今更あきれ我子の顔たど打守る
 ばかりなり。父はとかふの詞なく納
 所の内より昔の一腰引提出、ヤイ蓄

生めおのれにはまだ咄さねど、もと
おれが親は青砥左衛門藤綱といふて
ナ鎌倉の最明寺時頼公の見出しにあ
ふて天下の政道を預り武士の鑑と言
はれた人、おれが代になつても親の
かげ大名の数にも入たれど、今の相
模入道殿の世に成て倭人共に讒言し
られ浪人して廿餘年世を見限つての
捨坊主此形になつてもナ親の譲りの
簾直を立通した合邦が子に、よふも
くおのれがやうな女の道も人の道
もむちやくちやな娘を持たと思へば
無念で身節が碎けるわい、又高安殿
が今日迄うぬを助けて置つしやる御
心底を推量するに、もとおのれは先
奥方の腰元、後の奥方に引上ふと有
た時、達て辭退しおつたを心の正直
懇望で無理やりに奥方になり、ア、

手をかけず奥様とも言さずは此時宜
にも及ぶまい、殺さにやならぬやう
になつたも皆我業とお身の上を返り
見て親への義理に助けて置しやるを
エ有がたい恥かしいと、思ふ心がけ
しほどでも有なら譬へど程惚てお
つても思ひ切に切れぬといふ事はな
いわい、それになんじや其さまにな
つてもまだ俊徳様と女夫になりたい
親の慈悲に尋てくれとはド、どのほ
うげたでぬかした、エあつちから義
理立て助け置つしやる程生けて置て
はこつちも義理が立ぬ覺悟せいぶち
放すと早抜きかくる刀の鯉口、母は
取り付コレ合邦殿コリヤ了簡が違ふ
た、おじひで助けて下さる娘、お
志しを無足にして殺して義理が立
ますかハテ此上は随分と意見して俊

徳様の事思ひ切し命のかはりに尼法
師いかなる科の囚人も助るは衣の徳
浮世を捨れば死だも同然どこへの義
理も立道理と奥へ指ざし様々と宥め
すかして母親は我子の膝に膝すり寄
せ開やる通りの様子なればどの様に
思やつてもそなたの戀は叶はぬ程に
ふつつりと思ひ諦めて、早ふ早ふ尼
になつてたも、つどや二十の年ばい
も器量發明勝れた娘、尼になれと勸
めるはどんな心で有ぞいの、助たい
ばつかりに花の盛りを捨ててかゝ
れ逆しも黒髪の百筋千筋と撫しもの
剃ねばならぬ此時機は何の因果と許
りにて縋り付て泣居たる娘は飛退き
顔色かへエ、譯もない事いはしやん
すなわしや尼になる事いやじやく
折角豈よふ梳んだ此髪がどふむごた

らしう剃れるもの、今迄の屋敷風はもう取置て是からは色町風随分はでに身を持って俊徳様に逢たらばあつちからも惚てもらふ氣、けがにも假にも尼の坊主のと言ひ出して下さんすなと、けんもほろゝに寄付ず、そふぬかしやモウ勘忍がと父が身構へ母親はヲ、道理でござんす、腹の立は尤ぢやがモウ半時かして一時わしに預て下さんせ、手の裏を返すやうに思ひ切して見せませう、夫婦に成て長の年月たつた一度のわしが願ひ聞届けて下されと、願へば是非も中の間へ見返りもせず行て親母はいぢばる娘の手引立、むりやりに納戸へこそは入月の影さへ見へぬ目なし鳥、番ひ放れず淺香姫、一間の内より俊徳の御手を引て忍び出

今の様子を聞に付モウ暫くも此内にお前はどふも置まされぬ、何國へなりとお供せうと、手を引立れば俊徳丸、我業満す母上に斯迄思はれ參らするも身の罪障とは言ながら館を出し頃には勝り兩眼しいたる其上に、かゝるけやけき姿をばお目につかねば母上の愛着心は切もやせん、案内せよ今一度御目にかゝつて其上に入平夫婦も尋ね來ば召連て立退んと宣ふ聲を聞取門口ア、いや私めは先刻より始終の様子承はる、此所に御座有事里人の噂に聞ばもし敵方へもれては大事、一刻も早く御供せんと、氣をせく折しもかけ出る玉手、ナフなつかしや俊徳様お前に逢ふ計りにいくせの苦勞、物案じ、心をつくしたかひ有て、お健なお姿見たわいな

とすがり賜へば身をすりのけ、へエい情ない母上様館にても申すごとく同氏さへも娶ぬは君子の禁め、まして親子の中々に戀の色のとか程まで慕ひ賜ふは御身斗りか宿業深き俊徳にまだ、罪を重ねよとか、見るめいぶせき此癩病兩眼しいて淺ましき妾はお目にかゝらぬかや是でもあいそがつきませぬか、コレ道も恥をも知賜へと涙と俱に恨むれどホ、いオ、愚な事をおつしやります、其お妾も私が業むさいともうるさいとも何の思はふ思やせぬ自ら故に難病に苦しみ賜ふと思ふほどいや増戀の種となり、一倍いとしうござんすわいなア、フウ此業病を、母上の業とおつしやる其仔細は、さればいな去年霜月住吉で神酒と偽りコレ此飽で勧め

た酒は秘法の毒酒、癩病發する奇薬の力、中に隔をしかけの銚子、私が呑だは常の酒、お前のお顔を見にくうして淺香姫にあいそつかさせ我身の戀を叶へふ爲、前世の惡業消滅と家出有しはよい幸ひ、後を慕ふて知ぬ道、お行衛尋る其中も君が儘と此盃肌身放さず抱しめていつか鮑の片思ひ、つれないわいなと御膝に身を投伏てくどき泣、様子を聞いて俊徳丸無念と思せと義理の親、恨も言はれず兎に角に我身の不運と御落涙、姫はいつそ涙も出ず腹立紛れ取つて退けエ、聞ば聞く程餘りじやわいな

しやと恨み餘つてはしたなき玉手はすつくと立上りヤア戀路の闇に迷ふた我身、道も法も聞く耳持たぬ、モウ此上は俊徳様いづくへなりと連退て戀の一念通さで置ふか邪魔しやつたら蹴殺すと、飛かゝつて俊徳の御手を取て引立てるア、ラ穢らはしと、ふり切るを放れじやらじと追廻し、さゝへる姫を踏のけ蹴退けいかる目は薄紅梅逆立つ髪は青柳の姿も亂るゝ嫉妬の亂行、門には入平身に冷汗、こらへかねてかけ出る合邦娘が髻引掴みぐつと指込氷の切先、あつと玉ぎる聲に惘り戸をめりくかけ込入平、驚く御夫婦、情なや母上を手にかけしかと御涙、娘をかゝへる母親は心からと言ひながらヲ、衛なかる苦しかと歎けば今更人々も

涙くを添にける、合邦は怒りの顔色、筋骨立て、ヤア皆何の爲に其の涙、ナ、何ほへるのぢや、女房共われ泣ては左衛門様や俊徳様御夫婦へ心の義理が立まいがな、此様な念の入た大惡人をまだおのりや子じやと思ふか、おりやもふく憎ふてくどふもかうもたまらぬはい十年以來蚤一疋殺さぬ手で現在の子を殺すも浮世の義理とは言ひながら。是が坊主の有ふ事かいくコリヤヤイコリヤおのれ計りか此親まで佛の教を背かして無間地獄の釜こげによふしをつたなア魔王めと抉る拳を手負は押へヲ、道理でござんす道理じやく憎い筈じやが是には深い様子のある事物語るうち此刀必ず抜て下さんすなと苦しき息をほつとつぎ様

子といふは外でもなく外戚腹の次郎丸様、年かさに生れながら後に生れた俊徳様に家督を繼すを無念に思ひ壺井平馬と心を合し、御世繼の俊徳様殺さふといふかねての巧み推量ばかりか委しい様子立聞してなむ三寶義理ある中の御子と言ひ元は主人の若殿様、殺させては道立たず、此上は俊徳様御家督さへお繼なくば次郎丸様の悪心も自然と止でお命に別様ないと思案を極め心にもない不義徒いふもうるさや穢らはしい妹脊のかためと毒酒をすゝめ、難病に苦しめたはお命助けふばかりの手便、戀でないとの言譯は身をも放さぬコレ此孟繼母の心子は知らぬ片思ひといふ心の誓ひ、繼子繼母の義は立ても無や我夫通俊様根が踐しい女故、見

損ふた徒者とおさげしみを受るのが黄泉の障りになるはいのと、いへど合邦嘲笑ひ、ハ、ハ、ハ、ハ、夫程しれた次郎丸が悪事なせ通俊様へ告げぬぞへ、たつた一口言ひさへすりや癩病にする事も不義者にもならぬわい口利巧に言廻した逆今になつて、そんなくらしい言譯くふ様な親じやないわいイエ、ソリヤと、様の御了簡違ひ、其様子を夫へ告なば道理正しい左衛門様お怒りあつて次郎丸様切腹かお手討し知れた事、次郎丸様も俊徳様も私が爲には同じ繼子、義理ある中にかはりはない悪人なれど殺しては先立しやんした母ごぜが草葉の蔭でも無や歎、隔た中故訴人して殺したかと思はれては世間も立ず、俊徳様もお子の事、何の心よからふ

ぞ、あなたこなたを思ひやり、繼子二人の命をば我身一つに引受て不義者と言はれ悪人になつて身を果すか繼子大切夫の御恩せめて報ずる百歩一と言譯聞て人々は扱はそうかと疑ひの晴る程猶爺親はムウコリヤ娘其心でなせに又俊徳様の後追て家出した合點がいかねはい、ヲ、尤なお告なれど何國迄は行衛を尋あなたのお目にかゝらねばいたはしやあの癩病御本腹はござんせぬと、聞て入平不審顔、フウ何とおつしやるお前様がお傍に付てござれば御本腹なさるゝとは、さればの事典薬法眼に様子を打明毒酒の調合たのむ折から本腹の治法委しく尋ねしに、胎内より受たる癩病ならず毒にて發する病なれば寅の年、寅の月、寅の日寅の刻に

誕生したる女の肝の臓の生地を取り
毒酒を盛たる器にて病人に與へる時
は即座に本腹疑ひなしと聞た時の其
嬉しき、それで、此盃身に添持て
御行衛尋ねさがす心の割符と、様何
と疑ひは晴ましてござんすかヘライ
ヤヤ、そんなら何かそちが生
れ月日が妙薬に合た故一旦は癩病に
してお命助け、又身を捨て本腹させ
ふと夫で毒酒を進ぜたな、アイエ
、出かしおつた出かした、娘、コ
リヤやい娘モ、何にも言はぬ堪
忍してくれ、日本は扱置、唐にも
天竺にも今一人とくらべる人もない
貞女を畜生の悪人のと憎て口いふ計
りか親の手にかけむごい最期もコ、
此おれがぐどんなからぢや、あほう
なからぢや、赦してくれとどぶど居

て悔み涙ぞ道理なる始終を聞て俊徳
丸探り寄て繼母の手を取押敷き、
なきぬ中に義を重んじ御身を捨ての
御慈愛、誠の親共命の親共言にもつ
きぬ御厚恩身を百千に砕くとも何と
報じつづくすべき有難や忝けなやと頭
を疊に付け賜へば其お心とは露知ら
ず勿体ない道知らずとさげすんだの
が恐ろしいお赦しなされて下さりま
せと両手を合す姫の詫、連女の鑑
とも言る、お身に悪名受けたる御最
後いたはしやと姫入平も悲嘆の涙、
母は正体涙にくれほんにこの子が生
れたは寅の年寅の月寅の日寅の刻、
世間へ沙汰をせぬ物と世の教をば大
事ぞと夫婦親子の其外は犬猫にさへ
隠したに義理にせまれば我と我身を
責はたる無常の虎ひよんな月日に生

れたは持て生れた不運かと歎けば道
理と一座の涙、あふ坂増井の名水に
龍骨車かけし如くなり、手負は顔を
ふり上げてサア、と、様コレ此鳩
尾を切りさいて肝の臓の生血を取此
鮑で早ふ、と氣をいる娘、エ、憎
いと思ふた張り合ひなりやこそ切も
突もなつたもの今では眞底可愛い娘
をどふマアそれが、むごたらしい、
ヤ若役じや入平殿とやら大儀ながら
たのみます、是は又迷惑千萬、主人
の介抱お世話のお禮どんな御用も相
勤ふが御主人同然の玉手様とこへ双
が當られませう、こればつかりは御
免、エ、未練な用捨もふ人頼みに
は及ばぬと、懐劍逆手に取直せばマ
、待てくれ娘ととも生ぬそちが
命、臨終正念未來成佛々力頼む百萬

遍此人數でくる珠數の輪の中で往生
せいと取々廣げる珠數の輪の中に玉
手は氣丈の身構へ俊徳丸を膝元へ右
に懐劍左に盃、外には爺の親粒が
導師の役、鉦撞木母は涙の目も明か
ず宵は死だと思ひ子が回向の爲の百
萬遍、今又無事なと悦んだも露と消
行く進めの念佛、南無阿彌陀佛

願以此功德平等に死骸に取付き
繼り付、悲しみ涙添け涙、庭に波
打つばかりなり、歎きの中に母親は
頭の雪をうちはらひ、娘が菩提の尼
衣、俊徳君も涙をとどめ常大無邊繼
母の恩せめて少しは報ずる爲出世の
後は此邊に一字の寺院を建立し母の
尼公を住侶とせん繼母は貞女の鑑と
も曇らぬ心は清る江に月を宿せし操
を直ぐに月江寺と號くべしと仰は今
も尼寺と常念佛の鉦の音に昔の哀や
残るらん、父は常々勸進の自力他力
に此佛体建立して我住家を其儘一つ
の辻堂に營むも又平等利益東門中心
極樂へ娘を往生なし賜へと願ふ心は
後世の爲、現在の名殘數々は百八煩
惱夢さめて涅槃の岸に浮む瀬と筐に
残る盃の逆様事も善知識佛法最初の

くくくく内には難なく切さ
く鳩尾自身に血汐うけたる盃、指
付る手もわなくく俊徳丸は押戴
き母の賜、天地にも餘るばかりの御
芳志と只一口に吞干賜へば不思議や
たまたま両眼開け面色手足もまたよく中
忽ち兩眼開け面色手足もまたよく中
昔の姿に歸り、咲花の顔見る手眞苦
しき片頬に笑ひ顔やア御本腹かと一
座の悦び早斷末甍の四苦八苦、鉦も
早めて責念佛なまいだくくく

願以此功德平等に死骸に取付き
繼り付、悲しみ涙添け涙、庭に波
打つばかりなり、歎きの中に母親は
頭の雪をうちはらひ、娘が菩提の尼
衣、俊徳君も涙をとどめ常大無邊繼
母の恩せめて少しは報ずる爲出世の
後は此邊に一字の寺院を建立し母の
尼公を住侶とせん繼母は貞女の鑑と
も曇らぬ心は清る江に月を宿せし操
を直ぐに月江寺と號くべしと仰は今
も尼寺と常念佛の鉦の音に昔の哀や
残るらん、父は常々勸進の自力他力
に此佛体建立して我住家を其儘一つ
の辻堂に營むも又平等利益東門中心
極樂へ娘を往生なし賜へと願ふ心は
後世の爲、現在の名殘數々は百八煩
惱夢さめて涅槃の岸に浮む瀬と筐に
残る盃の逆様事も善知識佛法最初の

天王寺西門通り一筋に玉手の水や合
邦が辻と古跡をとどめけり。

十種香の段

本朝廿四孝

十種香の段
狐火の段

八重垣 姫 竹本南部太夫
武田勝頼 豊竹つばめ太夫
こし元 濡衣 豊竹呂太夫
長尾謙信 竹本相生太夫
白須賀六郎 豊竹辰太夫
原 小文治 豊竹千駒太夫
芳之助 鶴澤彌三郎
ツレ 鶴澤鶴太郎
琴 鶴澤綱治

人形

武田勝頼 吉田玉幸
腰元 濡衣 吉田政龜
娘八重垣 姫 桐竹紋十郎
長尾謙信 桐竹門造
白須賀六郎 桐竹紋太郎
原 小文治 吉田榮三郎

この淨瑠璃は武田上杉兩家の確執に齋藤道三の謀叛を取合せたる作にて『信州川中島合戦』三軍結袂ヶ原』等を藍本として更に趣向を立て技巧を凝らしたるものにて近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作で初演は明治三年正月興行の竹本座。

(床本)

十種香の段より狐火まで

十種香の段より狐火迄は四段目の切でこの段に織込まれたるところを申しますと上杉武田兩家和睦の爲とて義晴の後室手弱女御前が勝頼と八重垣姉とを許嫁とさせます、大切には道三が滅亡し、勝頼八重垣姫は芽出

度夫婦になるのですが十種香の場の勝頼は實の勝頼で先に切腹したのは花造りの簀作であつたのです。仍ち其處に取替子の面白さが湧いて來るのです。濡衣は簀作と通じておましがたが濡衣は齋藤道三の娘であります道三は菊造りの關兵衛で上杉へ忍び勝頼も亦花作りとなつて上杉へ忍び入つてゐたものです。狐火の水渡りの事は支那西湖の故事であるのを訪諏湖へ持つて來たものであります。

あらんかと、餘所ながら守護する某
それと悟つてかゝへしや、ハテ合點
の行かぬとさしうつむき、思案にふ
さがる一ト間には、館の娘八重垣姫
許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日よ
り。一ト間所に引籠り、床に繪姿か
けもくも、御經讀誦の鈴の音、こな
たも同じ松虫の、鳴く音に袖を濡衣
が、今日命日の弔ひの、位牌に向ひ
手を合せ、詞廣い世界に誰あつて、
お前の忌日命日を、甲ふ人も情なや
父御の悪事も露知らず、お果なされ
たお心を、思ひ出す程おいとしい、
嗚や未来は迷ふてござらう、女房の
濡衣が、心ばかりの此手向、千部萬
部のお經ぞと、思うて成佛して下さ
いせ、南無阿彌陀佛くく。誠に
今日は霜月廿日、我身替りに相果し

勝頼が命日、暮行く月日も一年餘り
南無、幽靈出離生死頓生菩提、詞申
し勝頼様、親と親との許嫁、在りし
様子を聞くよりも、嫁入する日を待
兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見
れば見る程美しい、こなん殿御と添
臥しの、身は姫御前の果報ぞと、月
にも花にも樂しみは、繪像の傍で十
種香の、煙も香花となりたるか、回
向せうとお姿を、繪にはかゝしは
せぬものを、たましひかへす反塊香
名畫の力もあるならば、可愛とたつ
た一ト言の、お聲が聞きたい聲きた
いと、繪像の傍に身を打ふし、流涕
ごがれ見え給ふ、詞あの泣き聲は八
重垣姫よな、我名を呼びし勝頼を、
誠の夫と思ひ込み、甲ふ姫と甲ふ濡
衣、不慙ともいぢらしとも、云はん

方なき二人が心と、そぞる涙にくれ
けるが、詞ア、我ながら不覺の涙と
襟かき合せ立上る、後にしよんぼり
濡衣が、詞申し箋作様。合點のゆか
ぬはあなたのお姿、どうした事で此
やうに。オ、不審尤、はからずも
謙信に、かゝへられたる衣服大小。
テモ扱も、衣紋付きなら上下の召様
まで、似たとはおろか矢張其まゝ、
かたみこそ今は仇なれこれなくば、
忘るゝ事もありなんと、讀みしは別
れを悲しむ歌、かたみさへぢやに我
夫に、みちん變らぬ此お姿、見るに
つけても忘られぬ、詞私や輪廻に、
迷ふたそうな、御ゆるされてと仗沈
む、泣聲もれて一間には、不審立聞
く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、
姿見紛ふ方もなく、ヤア我妻が勝頼

様と飛立つ心を押沈め、正しうお果
なされしもの、似たと思ふは心の迷
繪像の手前も恥しと、立戻つて手を
合せ、御経讀誦の鈴の音。勝頼公は
濡衣が心を察して聲疊り、詞はかな
き女の心から、歎くは理り去りなが
ら、定めなき世と諦めよと、諫むる
詞こなたには、心空なる其人の、若
やながらへおはすかと、思へば戀し
くなつかしく、又覗いては繪姿に、
見比べるほど生寫、似せて矢張り
ほん／＼の、勝頼様ぢやないかいの
と、思はず一ト間を走り出で、縮り
付いて泣給へば、はつと思へどさあ
らぬ風情、詞こは思ひ寄ざる御仰せ
我等装作と申す花作、漸々只今召し
かゝへられ、衣服大小改めし新參者
勝頼とは覺えなし、御廬相あるなど

突放せば、詞ムい何と云やる、今父
上にかゝへられし新參者、花作の装
作とや、自とした事が、餘りよう
似た面ざしの、もしやそれかと心の
煩惱二人の、手前恥しながら、詞コ
レ濡衣、此装作とやら云ふ人を、そ
なたは疾うから近付きか。エイ。い
やいの、知る人であらうがの。アノ
お姫様とした事が、たつた今見えた
お人、なんのまあ私が。イヤ隠し
やんな今の素振、忍ぶ戀路といふや
うな、可愛らしい仲かいのと、思ひ
もよらぬ詞に悔り、詞オ、お姫様の
仰有る事わいの、人にこそよれ、な
んのあなたに勿体ないと云やるから
は、どうでもそなたのしるべの人か
イーエ、さうではなけれ共、大事の
お主の目をかすめ、忍び男を拵へる

は勿体ないと申す事で御在ります。
ム、すりやしるべの人でなく、殿御
でもない人なら、どうぞ今から自
を、可愛がつてたもる様、押付なが
ら、媒を、頼むは濡衣さま／＼と、
夕日まばゆく顔に袖、あでやかなり
し其風情、詞オ、お姫様とした事が
まだお子達と思ひの外、大それたあ
の装作殿を。サア見染めたが戀路の
始め、後とも云はず今爰で、媒せ
いと仰有るのか。我折れ、ほんに大
名のお娘御とて、油断はならぬ戀の
みち、品によつたらお取持ちいたし
ませうか。コレ／＼濡衣、必らず産
相云ふまいぞ。サア何もかも私が吞
込んで、ナ、吞込んでお取持すまい
物でもないが、眞實底から装作殿に
御執心でござりますかと、問はれて

猶もあからむ顔、勤する身はいざし
 らず、姫御前のあられもない、殿御
 に惚れたと云ふ事が、嘘、偽に云
 はれうか、詞其お詞に違ひなくば、
 何ぞ値な誓紙の證據、それ見た上で
 お媒。オ、それこそ心易い事、其
 の誓紙さへ書いたらば、詞イエ、
 夫もこつちに望がある、私が望む誓
 紙と云ふは、諏訪法性の御兜、それ
 が盗んで貰ひたい。ヤア何と云やる
 諏訪法性の御兜を、盗み出せと云や
 るのは、扱てはあなたが勝頼様、と
 云ふ口押へて、詞ハテ滅相な勝頼呼
 ばはり、みぢん覺のない糞作、重忽
 ばしのたまふなと、云ふ顔つれく
 打守り、許嫁計りにて枕交さぬ妹春
 中、おつゝみあるは無理ならねど、
 同じ羽色の鳥つばさ、人目にそれと

分らねど、親と呼び又つま鳥と呼ぶ
 は、生あるならひぞや、いかにお顔
 が似ればとて、戀しと思ふ勝頼様、
 そも見紛うてあられうか、世にも人
 にも忍ぶなる、御身の上と云乍ら、
 連添ふ私に何遠慮、つかうくと
 御身の上、明して得心さしてたべ、
 それも叶はぬ事ならば、いつそ殺し
 てくと、縫り付いたる恨み泣き、
 勝頼わざと聲あらゝげ、詞ヤア聞き
 わけなきたはふれ事、いかほどにの
 たまふとも、覺えなき身は下司下郎
 餘所の見る目もはゞかりあり、そこ
 退給へと突放せば、詞スリヤ何の様
 に申しても、勝頼様ではおはさぬか
 ハア、はつとばかりに糞作が、差
 添逆手に取給へば、こは御遠慮と止
 むる濡衣、詞イヤく放して殺して

たも、勝頼様でもない人に、戯れ事
 の恥かしや、心の穢れ繪像へ言譯、
 どうも生きては居られぬと、又取直
 すを猶も押留め、詞オ、遠は武家の
 お姫様天晴なるお志、其お心見る
 からは、勝頼様に逢はせませう、ソ
 レ、そこにござる糞作様が、御推量
 に違はず、あれが誠の勝頼様、ちや
 つとおおひなされませと、突やられ
 てはさすがにも、始の恨み百分一、
 聞えませぬが精一ばい、後は互に抱
 付き、つい濡初に、濡衣も、心とき
 つく折柄に、父謙信の聲として、詞
 糞作は何れに居る。搦尻への返答、
 時刻移ると立出れば、はつと糞作飛
 しさり、詞御支度よくば直様参上。
 ホ、委細の事は此の文箱に、片事も
 早く罷越せ、はつと領掌文箱携へ

搦尻しほりさして急いそぎ行く。謙信けんしん後ごを見送みおくつて、詞ことばヤアア者共ものども、用意よういよくば早はや來きたれと、仰おほせせにはつと白須賀しろすか六郎ろくろう原小文治はらこぶんぢ、更さら科しななんどの譜代ふだいの郎黨らうどう御前ごぜんにすゝめば謙信けんしん男おとこんで詞ことば今いま此この訪す訪すの湖うみに、氷閉こほりれば渡海わたうみは叶かなはず搦尻しほり迄までは陸路りくじゆの切所せきじよ、油斷ゆだんして不覺ふかくを取るな、ハア畏おそり奉たてると、勇ゆうみ進すすんでかけりゆく。後あとに不審ふしんは八重垣やえがき姫ひめ、申まをし父上ちちうへ、こととんくしいの有あり様さま、何なに事ことやらんと尋たずねれば。詞ことばホアあれこそは、武田勝頼たけだかつら討手うつけの人数にんすう、何なにに勝頼かつら様さまを討手うつけとは、コハそもいかに何故なにゆゑと驚おどろく二人ふたりをはつたと腕うでめ付つけ詞ことば諏訪すわ法性ぽうじやうの兜かぶとを盗ぬすみ出ださんうぬらが巧たくみ、物ものかげにて開ひらいたる故ゆゑ、勝頼かつらに使し者しやを云い付つけけ歸かへりを待まちつて討取うちとさんと、牒合しめあはせ

る討手うつけの手配てはひ、エイそんなら今の討手うつけの者は、勝頼かつら様さまを殺ころさんの爲ためか、ハアはつとばかりにどうと伏ふし今日けふは如何いかなる事ことなれば、過すぎぎ去さり給たまひし我夫わがまに再またび逢あふは優曇華うゑだんげと、悦よろこんでみたものを、又またも別わかれになる事ことは、何なにの因果いんぐわぞ情なさけなや、父ちちのお慈悲じひにお命いのちを、どうぞ助たすけて給たまはれと、口くち説ときまくに目めもやらず、詞ことばヤア武田たけだ方かたの廻まわし者もの、憎にくき女むすめと濡衣ぬれぎひき引ひたてうぬには尋たずねる仔細しさいあり、奥おくへ失うせうと小腕こがねとり、情用なさけうしや捨すてあら氣きの大將たいしやう帳臺ちやうだい深ふかく入いり給たまふ。思おもひにや、焦こがれてもゆる、野邊のべの狐火きつねのび小夜よふけて、狐火きつねのびや、狐火きつねのび野邊のべの野邊のべ、狐火きつねのびさよふけて、幾重いくえもれくる爪音つなねは、君きみをもうけの奥御殿おくごてん、こなたは正体せいだい涙なみだながら、詞ことばアレア奥おくの間まで檢校けんぎやうが

颯さつふ唱歌せうかも今身いまみの上うへ、おいとしいは勝頼かつら様さま、かゝるの巧たくみのあるぞとも、知らずはからぬ御身ごみの上うへ、別わかれとなるもつれない父上ちちうへ、諫いさめても、歎なげいても、聞き入れもなき朋とも人ひと、娘むすめ不ふ啓けいと思おもはずなら、お命いのち助たすけて添そはせてたべ、と身みを打伏うちふして歎なげきしが、詞ことばイヤア泣ないてゐられぬ所ところ、追手おつての者ものより先まへ廻まわり勝頼かつら様さまに此事このことを、お知らせ申まをすが近道ちかみちの、諏訪すわの湖船うみふね人ひとに渡わたり頼たのまん急いそがんと、小襖取手こづまどての甲斐かみ斐ひくしく、かけ出だせしが、イヤア詞ことば今いま湖うみに氷張こほりはり詰つめ、船ふねの往來かうらいも叶かなはぬよし、歩路あゆみぢをいては女の足あし、なんと追手おつてに追おつかれう知らすにも知らされず、みすく夫おとこを見殺みころしにするは、いかなる身みの因いん果ぐわ、詞ことばアア羽はねがほしい、羽はねがほしい

とんで行きたい、知らせたい、逢ひたい見たいと夫戀ひの、千々に亂るゝ憂き思ひ、千年百年泣きあかし、涙に命絶ゆればとて、夫の爲にはよもなるまじ、此上頼むは神佛と、床に祭りし法性の兜の前に手をつかへ詞此御兜は諏訪大明神より武田家へ授け給はる御寶なれば、取も直さず諏訪の御神、勝頼様の今の御難儀、助け給へすくひ給へと、兜を取て押頂き、押頂きし佛の、もしやは人の咎んと窺ひ下りる飛石傳ひ、庭の溜の泉水に、うつる月影怪しき姿、はつと驚き飛退しが、詞今のは儘に狐の姿、此泉水に寫りしは、ハテめんようなどときつく胸を撫でおろし、こはくながらそろくと、さしのぞく池水に寫るは己が影ばか

り、詞たつた今此水に、寫つた影は狐の姿、今又見れば我が佛、幻と云ふ物か、但し迷ひの空目とやらかハテ、怪しやとつおいつ、兜をそつと手に捧げ、覗けば又も白狐の形、水にありく有明月、不思議に胸もにぎり江の池の汀にすつくりと、詠め入つて立ちたりしが、詞誠や當國諏訪明神は狐をもつてつかはしめと聞つるが、明神の神體に等しき兜なれば、八百八狐つき添ひて、守護する奇瑞に疑なし、合オそれよ思ひ出りたり、湖に氷張り詰むれば渡り初する神の狐、其足跡を知邊にて心安う行きこう人場、狐渡らぬ其先に渡れば、水に溺るとは、人も知つたる諏訪の湖たとへ狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に神の力の加は

る兜、勝頼様に返へせとある、諏訪明神の御教へ、ハア、忝や有難やと、兜を取つて頭にかけば、合忽ち姿狐火のこゝにも燃へ立ち合かしこにも亂るゝ姿は法性の、兜を守護する不思議の有様、諏訪の湖か渡り甲斐と越後の兩將と其名も今に残らん。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。

賣店は

二階東側及休憩所に御座います。お菓子番附、雑講、お煙草その他審間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處で御願ひ致します御座席では御遠慮下さい

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一番前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席

案内人へ

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします御祝儀お心附は堅くお辭退申し上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由に御飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合には乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

御休憩の間は

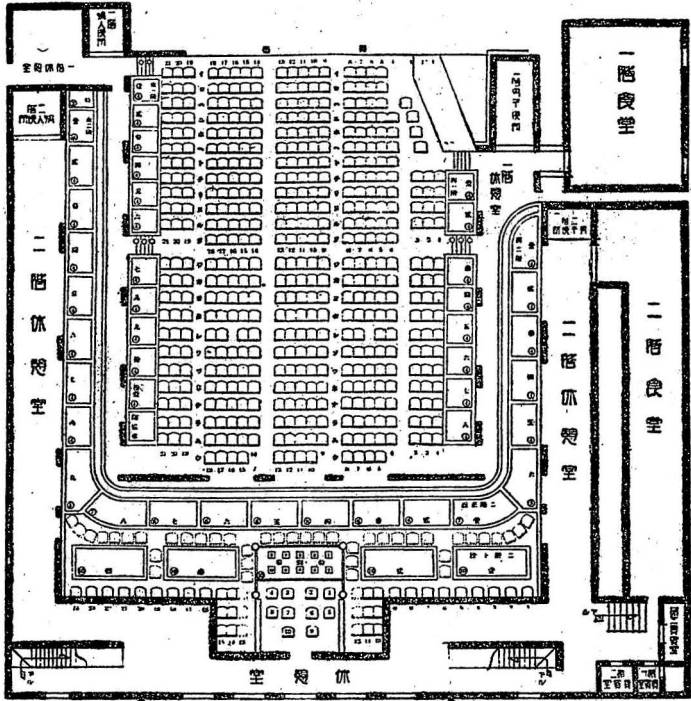
一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座りますから御使用下さい。△シタアルはレイトローション使用。

四ツ橋文樂座

前賣切符専用電話南四七二二番

電話南(75)三〇七八八番

文樂座御席場案内



御・観・覽・料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になつて居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出來、
 またお出入が御自由です。

前・賣・切・符・壹等お座席・壹等椅
 子席のお切符は五日前から發
 賣致します、また五日以後の
 お切符も壹等席に限り御豫約
 申し上げますから上圖の座席
 表に依つてお早く御望みの御
 場席をお申し込みになればお
 心のまゝにお好きな處が御自
 由にされます御用金の節お呼
 出しの電話は

南75四七一―番で御座ぬます

切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します。

尙多人數様お團體様のお申込
 も御相談いたします。

昭和十年九月廿九日印刷
昭和十年九月三十日發行

大阪・四ツ橋文樂座
發行人 大塚 良三

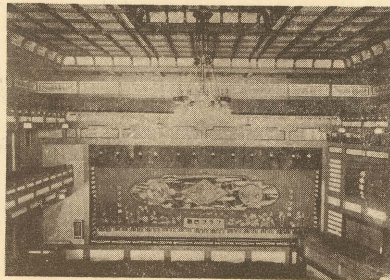
編輯 成山 桂三

印刷所 永井太三郎

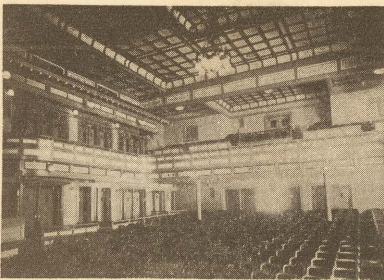
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所



大阪文樂座全景



大阪文樂座舞臺



大阪文樂座客席

伊賀越道中双六三
繪本大切記
由良の巻千軒長者
攝州合邦ヶ过
本朝廿四孝



あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大坂市東區南本町二丁目

電話船場 4940 ㊤

大坂市西區土佐堀一丁目

電話土佐堀 3083・4939
4940・4941 ㊤